TOTO 通信

2013年 春号

Toward a Creative Architectural Scene

特集

Special Feature Nostalgic Design?

やわらかなデザイン

TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 499
Spring 2013

特集 やわらかなデザイン

Special Feature Nostalgic Design?

バウハウス以来のモダンデザイン、それはミニマルにまで行き当たり、やがて袋小路に入り込むのではないかという恐れ、なきにしもあらずだった。それがいつの頃からか、不思議なデザインが住宅建築の世界にも見え隠れするようになった。共通の美意識があるのか、通底する思考が流れているのか、まだはっきりしたことはいえないかもしれない。しかし、アプローチこそさまざまだけれど、どこか「なつかしい」という言葉でくくれそうな気配が見えてきている。やわらかな思考の流れとして追ってみた。

Contents

特集1／インタビュー 引き算をしない試み
「house I」
設計／寳神尚史 4

特集2／ケーススタディ ときには町工場のように
「K」
設計／木村吉成+松本尚子 16

特集3／ケーススタディ 過去と現在が遭遇する場
「カヤバ珈琲」
設計／永山祐子 26

特集4／インタビュー 時の流れに押されない
「スプリットまちや」
設計／塚本由晴+貝島桃代 34

シリーズ

旅のバスルーム 86 アト・ザ チャールズ・ブリッジ(チェコ プラハ)
文・スケッチ／浦 一也 44

現代住宅併走 22 津端邸 文／藤森照信 46

最新水まわり物語 33 東京ステーションホテル 52

地域に生きる会社 59 浜松建設 58

TOTOギャラリー 間で展覧会をします 中村好文展「小屋においでよ!」 60

news file 62

『TOTO通信』をインターネットでご覧いただけます。

TOTO Web Site
www.toto.co.jp

表紙写真／「K」
(16～25ページ)の外観。
写真／傍島利浩

編集制作／中原大久保坂口編集室
デザイン／岡本一宣デザイン事務所
印刷／ゼネラルアサヒ

「house I」2階洗面浴室を見る。右手に見えるのは物干部屋。洗面室入り口のアーチは、半円でなく、扁平なアーチを採用。

設計

寳神尚史

建物名

「house I」

昔からそこに立っていた倉庫のような新築住宅。そこに見える風情の元は何か。引き算をしないことだと建築家は言う。受け入れ、さらに進化させること、そこにはすでに記憶のなかにあるなつかしさとは別次元の表現が見える。

聞き手・まとめ／伏見 唯　写真／阿野太一

photo 1

南側から見た全景

周囲に威圧感を与えないよう、小さな切妻屋根が3つ連なる。一番左のアトリエをセットバックさせ、街並みとバランスをとっている。

引き算をしない試み

特集／やわらかなデザイン その1

Special Feature
Nostalgic
Design ?

インタビュー

分棟と小部屋による平面計画

―― 本日、この住宅「ｈｏｕｓｅＩ」を拝見し、家全体から妙ななつかしさを感じました。私の実家はマンションでしたから、この住宅と私自身の住体験は、まったく別物なのに、なぜか見知った風情が漂っている。今回は、特集テーマである「やわらかなデザイン」という観点でお話をうかがいます。その前に、まずは住み手の家族構成や要望などの与条件から、この住宅の概要を教えてください。

寶神尚史　この住宅は、東京郊外の住宅街に立つ、夫婦と子どもふたりの４人家族の住まいで、来客用の客室、豊富な蔵書の書庫、そしてご夫婦の仕事場などを併設した、大きな兼用住宅です。ご主人は作家なので、いわば戦場のような仕事場と、家族と共に過ごす心安らぐ住まいとのあいだに、心理的にも視覚的にもできるだけ距離感を与える必要があると考えました。そのため、１棟の大きな建物をつくるのではなく、仕事場と住まいを分棟とし、複数棟で庭を囲むコートヤード形式の平面計画としました。仕事場と住まいに加えて、玄関と客室の棟、書庫や読書室の棟を分けて、計４棟で構成されています。

―― ４棟に分けられているだけでなく、各棟の間取りも小割りになっていますね。

寶神　寝室や子ども部屋などは用途上の必要最低限の大きさでよいという要望があったのと、奥さまの作業部屋や読書室などの小さなスペースしかとらない部屋が必要でしたので、その結果としてたくさんの小部屋ができました。敷地面積４２０㎡、延床面積２９２㎡ほどの広さがある住宅の中に、こうした小部屋をどのように配置するか、そして小部屋を空間としてどのようにつなぐかが、設計の肝となりました。たとえば、作業部屋や台所の配置によって、玄関から、リビング、ダイニングに至る一連の空間を雁行状にずらす構成や、子ども部屋からリビングの吹抜けを見下ろす構成は、いずれも小部屋の配置によってつくられた空間です。雁行状の平面は、空間をゆるやかにつなげながらも個別の場を生み出しますし、吹抜けを見下ろすような、自分の通ってきた動線を見返せる構成が、空間にダイナミズムを生み出すと思っています。

photo 2

エントランス

引き戸を開けると前庭。玄関へと続く。左の引き戸の奥は駐車スペース。木製の建具は窓枠を小割りにすることで、さまざまなプロポーションをもつ開口部に統一感を与える。

物語を感じる住まい

―― そのような小部屋の配置によってつくられた印象的な場や空間は、どのような意図で設計されたものなのでしょうか。

寶神　この住宅は仕事場を兼用しているので、住み手はこの住宅の中で長い時間を過ごすことになります。そのため、ずっと家にいても飽きないシーンをたくさんつくることが重要だと考えました。その一方で、実際にはひとつの家族が暮らす一軒家ですので、なんらかのルールでまとめる必要があります。大きな規模、多岐にわたる部屋群をなんらかの「意匠的なルール」でまとめようとすると、どうしても意匠上の拘束力が強くなります。ですので、そのようなルールを適用するのではなく、たとえば物語を読み終えたときの読後感のような、決め込まない、やわらかなまとめ方で組み上げたかったという思いがあります。明るいリビング、もっと明るいサンルーム、そして暗い読書室……などと、空間の前後関係における変化を大切にしながら設計することを意図しました。

―― 小部屋の配置のほかに、どのような工夫が、物語を感じる設計としてなされていますか。

寶神　まず、設計上、各部屋の印象を多様に生み出すためには、光や視線の扱いに不自由をしたくなかったので、開口部のあり方にこだわりました。室内の空間構成を優先して、開口部の寸法やディテールを自由に扱ってしまうと、内部空間の光や視線は効果的になるかもしれませんが、外観や内観の印象が不統一になってしまいますから、ふつうは光や視線だけを重視して窓を配置するのは難しいです。そこで、外観や内観に統一感を与えながらも光や視線を自由に扱える開口部のあり方を考えました。たとえば、入り口の大きな引き戸をはじめ、玄関扉やアトリエの高窓などの建具は、すり出し窓や開き戸、引き戸などと形式も大きさも違うのですが、それぞれを小割りにした単位の大きさや色味を揃えることでモデュールとして、全体を調和させようとしています。こうしたルールにすることによって、内部空間を豊かにする光や視線のために、位置や大きさを自由に計画できることになります。そういった操作により、物語を感じる幅を広くしてい

最初の小さな空間ともいえる前庭。大きな引き戸を開け放てば街とつながり、閉じれば室内化する。

photo 3

前庭

photo 4

1階リビングからダイニング方向を眺める

手前からリビング、暖炉室、ダイニング、ポーチ。ひとつながりの空間を、段差、素材、カラーなどの違いによって、ゆるやかに小部屋化している。左の小窓の奥は作業部屋。

ます。

――アーチや家型も印象に残ったのですが、こういった意匠も物語を感じるための工夫なのでしょうか。

寶神　アーチは施主からの要望でしたが、非常に強い印象を受ける形態ですから、小部屋の中にのみ使うことにしました。そのときに、イデオロギーを感じないように注意しました。アーチのような歴史的な意匠は、いろいろな様式や時代を連想させやすいものだと思いますので、この住宅でつくりたかった印象をくずしてしまう可能性がありました。そのため、ここでは半円アーチではなく、扁平な円弧のアーチにしています。アーチを歴史から解放し、新たな物語をつくり出す無垢な形態に還元しようとしたのです。僕が青木淳建築計画事務所で担当していた青森県立美術館（2006）でも、排気口にアーチを使用していました。このときはアーチのもつ文脈を意識的に扱っていましたが、今回はそうしたアーチの文脈をもって何かを働きかけようという意図はまったくありませんでした。

一方で家型は、既存の意味合いを期待して意識的に使っています。家型もアーチと同じくらい強い印象を受ける形態だとは思いますが、家型の風情には多くの人が好意的な印象を受けるのではないでしょうか。家型は単純な形態であるにもかかわらず、なぜか人々は形態の行間に豊かさを感じる。いわば「含みの太さ」をもった形態なのだと思っています。また、家型は一戸の住宅を示す記号的な性格もありますから、大きな建物を分割し、小さな建物の集積に見せる効果もあります。この建物も前面道路側から見ると、3つの家型の連棟にも見え、敷地の大きな建物の威圧感を緩和していると思います。そういう考えがあるので、「TAMAMO」（07）などの過去の設計でも家型を何度も使ってきました。ちなみ

photo 5

1階ダイニング

ダイニングとポーチ。ポーチもまた、半戸外の小部屋。奥の扉を開けると、収納ホールを経て、書庫・読書室につながる。

photo 6

1階暖炉室からリビングを眺める

暖炉室から、一段下がったリビングを見る。渡り廊下の奥が玄関。壁際の柱は上階の子ども部屋を支える。小部屋の面積を先に決めるため、このように壁と構造柱がずれた場合は、柱を現しにしている。

に、家型に対する好みは設計者によって異なるようで、使う人は何度も使うのですが、使わない人は生涯使わない、そんな傾向があるかと思っています。ヘルツォーク&ド・ムーロン、藤本壮介、アトリエ・ワン……家型を用いる設計者は、何度も繰り返し使っています。

―― 寶神さんが設計時に考えられた物語に共感できるかどうかで、この住宅の印象が変わりそうです。最初に述べたとおり、妙な「なつかしさ」を感じている私は、寶神さんの物語に共感しているということなのでしょうね。

寶神 多くの人が好意的になつかしさを感じる「共感力」の強い形態や空間があると思っています。その力を無視せずに、丁寧にコントロールしながら使っていければという想いがあります。光や視線を調整したりする一方で、アーチや家型を採用したりしながら、ひとつの物語を読むような読後感でまとめあげていく。そのような、人が空間を読み込む基本的な要素と、多くの人が共感するイメージを同時に扱いながら組み上げる設計手法に関心をもっています。それは、感性でとらえる部分もたぶんに含みながら、理屈でカチッと来る部分ももたせた空間づくりをすることであり、感性的でありながらも共感力を失わない設計になるのではと思っています。

引き算をしない設計

―― ところで、青森県立美術館の話が出ましたが、あの建物では「白く塗れ！」という青木淳さんの言葉のとおり、真っ白な空間が印象的ですが、この建物は少しあたたかみのある色で塗られていますね。

寶神 青森県立美術館では、白塗装のなかでもN－95という、白のなかでも特別に白い色が使われています。よく使われる白塗装には、じつはグレーが少しだけ入っているのですが、N－95は真っ白です。これは、白さを前面に際立たせた塗装で、いわば「白さを語る白」なのだと思います。ただ、この住宅では背景色として白を扱いたいと思いましたので、クリーム色に近づけました。特別なテーゼを込めない、単に地としてなじむ色を目指したものです。この住宅の施主は、わりあい装飾的な家具を好む方で、ドアノブやペンダントライトもそういったものを選んでいますから、建築側が真っ白なミニマルなデザインだと、全体がなじまなかったと思います。

―― 確かに、色も構成もミニマルなデザインではありませんね。ところどころで木造の柱や屋根の架構がむき出しになっているのはなぜですか。

寶神 この住宅は木造在来工法でつくられていますから、構造柱は910㎜のモデュールで整然と並んでいます。一方で、壁の位置は小部屋の面積

photo 8 階段

photo 9 2階通路より洗面・浴室を見る

写真上／階段から暖炉室を見下ろす。下／洗面室は藤色。入り口はアーチが採用されているが、様式や時代を連想させないよう、半円ではなく、扁平な円弧のアーチにしている。

photo 7 2階サンルーム

トップライトから自然光が降り注ぐサンルーム。壁面はほかに比べ、意図的にラフな仕上げにしている。

や配置によって決めていますから、ところどころで壁と構造柱の位置がずれて、構造柱がむき出しになっているのです。また、家型の建物形状にしたために天井高さが確保できないところは、舟底天井にしているので屋根の架構がむき出しになっています。空間、形態、構造の3つの要素に並行して向きあった結果です。3つのうちのどれかを特別に優先するのではなく、場所によって臨機応変に主従関係を切り替えました。ひとつに統一せずに、複数の原理で設計することにより、ある原理が別の原理に思わぬ効果をもたらすと考えたのです。構造のことを考えたら、おもしろい空間が生まれたり、空間のことを考えたら、おもしろい構造が生まれたり、外観のことを考えたら、おもしろい内観が生まれたり……建築には、思考の外側から降ってくる豊かさがあるのではないでしょうか。

―― よくわかります。ガチガチの計画の論理が、必ずしも建築を生み出すとは限りませんよね。今回の特集テーマ「やわらかなデザイン」を生み出すためには、そういった柔軟な設計手法も必要なのかもしれませんね。

實神 「やわらかなデザイン」にするためには、「引き算」をしない設計が重要だと思っています。施主の要望を受け入れなかったり、構造を無理に省いたり……きれいな建築空間をつくるために、設計上で出てくるさまざまな事柄を受け入れずに捨て去る、つまり「引き算」をしてしまうと、どんどん「とがったデザイン」になっていく気がするのです。要望や構造などで想定していなかった事柄が出てきたとしても、僕はそれを受け入れて、むしろ建築にとって効果的なあり方に転換させることを考えたいと思っています。僕にとって、それが設計の楽しみでもあるし、もしかしたらそれが、「やわらかなデザイン」を生んでいる秘訣なのかもしれません。

photo 10 2階子ども部屋

必要最小限のスペース。右手壁の中が個室。上部はロフト。明暗がコントロールされ、奥のサンルームが白く浮かび上がっている。切妻屋根による天井勾配が生きる。

中央奥の明るい小部屋は物干し部屋。壁と構造柱の位置がずれ、構造柱がむき出しになっている。藤色の床の部分は洗面・浴室につながる。

photo 11　2階現しの柱

photo 12

1階アトリエ

外部の状況や時間帯にかかわらず、安定した状態を確保するため、4面とも上部に開口が設けられた。

photo 13

屋上

屋上から周囲に合わせた切妻屋根の連なりを見る。

わかりやすいこととわかりあえることは違う

文／伏見 唯

Fushimi Yui

今回の取材を通して、寶神尚史さんの設計には大きくふたつの趣向が見られました。まずひとつは、「物語を感じる」と形容される空間意匠の徹底したつくり込み。光や視線、そして素材などの扱いによって、ある種の演出的な意匠設計がなされています。明るさのコントラストを強くしたり、外壁のような素材を内装に用いることで、内外の空間を反転しようと試みたサンルームは、この住宅のなかでもとくに印象的でした。寶神さんがつくりあげた、住み手が所作に酔いしれてもおかしくないほどの、日常という物語の舞台のようです。

もうひとつは、そうしてつくり込まれた空間のなかに、住み手のライフスタイルや構造、敷地などのコンテクストが反発することなく受容されているところです。寶神さんはこれを「引き算をしない設計」と言っていますが、意匠設計のなかに、あ

photo 14

1階ホール

アトリエのある仕事棟のらせん階段。奥の引き戸の向こうがアトリエ。アトリエ手前の左手にミニキッチンがある。

photo 15

2階読書室

豊富な蔵書が納まる書庫の中につくられた、ひとり用の読書室。

えて意匠以外の外的な決定因子を組み込むことで、機能や合理の美しさをむしろ獲得しているように見受けられました。暖炉室の中ほどに立つ裸の構造柱や、サンルームの架構がむき出しになった天井は、素朴な小屋にも郷愁を覚える建築への純真な感情を思い出させてくれます。物語の結晶である舞台芸術は、こうした現実のコンテクストを通して、人間の本性になじんでいくのかもしれません。

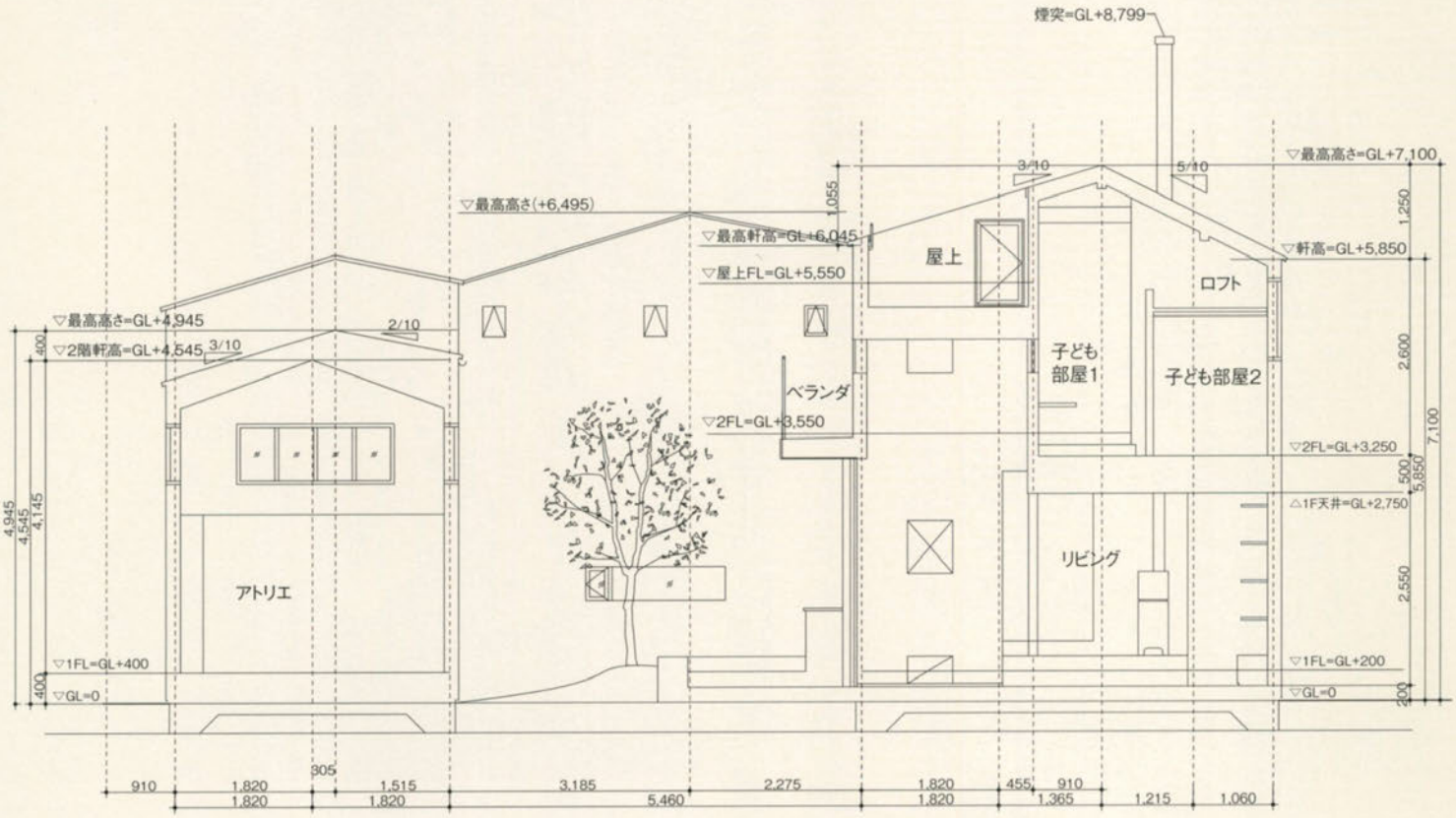
建築計画には、「わかりやすいこと（理解）と、わかりあえること（共感）は、全然違う」という根深く普遍的な問題があると思います。計画のときに求められる理屈が、必ずしも体験するときの共感には結びつかないからです。しかし寶神さんは、共感を伴う計画を模索していました。それは可能か？　計画論の大きな題目を感じる住宅でした。

建築家の寶神尚史さん（写真左）と、インタビュアの伏見唯さん（写真右）。

1/100

断面図

0 1 2m



寶神 尚史

Houjin Hisashi

1975年神奈川県生まれ。97年明治大学理工学部建築学科卒業。99年同大学大学院修士課程修了。99〜2005年青木淳建築計画事務所、05年日吉坂事務所設立。おもな作品／「TAMAMO」(07)、「JINS Hi」(08)、「house T」(09／東京建築士会住宅建築賞)、「ginza D」(11) など。

photo 16

東側全景。

「house I」

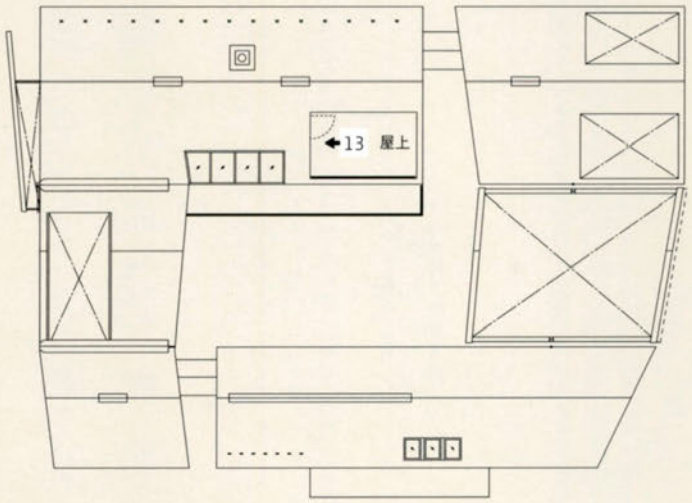
建築概要	
所在地	東京都武蔵野市
主要用途	仕事場兼用住宅
家族構成	夫婦+子ども2人
設計	寳神尚史+穐吉彩加／日吉坂事務所
構造設計	金箱構造設計事務所
施工	青
敷地面積	419.79㎡
建築面積	167.68㎡
延床面積	292.48㎡
階数	地下1階、地上2階
構造	木造在来工法
設計期間	2010年6月～2011年5月
施工期間	2011年6月～2012年3月
おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板t=0.35㎜
	竪はぜ葺き
外壁	アクリル系壁仕上げ吹付け
	リシン吹付け
開口部	木製サッシ アルミサッシ
外構	植栽 砂利敷き タイル
おもな内部仕上げ	
キッチン	
床	タモ複合フローリングt=15㎜
壁	50㎜角タイル
	100×200㎜タイル　漆喰塗装
天井	PBt=9.5㎜ AEP
洗面室	
床	パイン無垢フローリングt=21㎜
壁	PBt=12.5㎜ ポーターズペイント
天井	PBt=9.5㎜ ポーターズペイント
浴室	
床	200㎜角タイル
壁	95×20㎜角タイル
	アクリル系壁仕上げ吹付け
天井	アクリル系壁仕上げ吹付け
リビング・ダイニング	
床	タモ複合フローリングt=15㎜
壁	PBt=12.5㎜ 漆喰塗装
天井	PBt=9.5㎜ 漆喰塗装
サンルーム・子ども部屋	
床	パイン無垢フローリングt=21㎜
壁	PBt=12.5㎜
	漆喰塗装 パイン羽目板
天井	PBt=9.5㎜ AEP
アトリエ	
床	タイルカーペット
壁	PBt=12.5㎜ 漆喰塗装
天井	PBt=12.5㎜ AEP

1/250

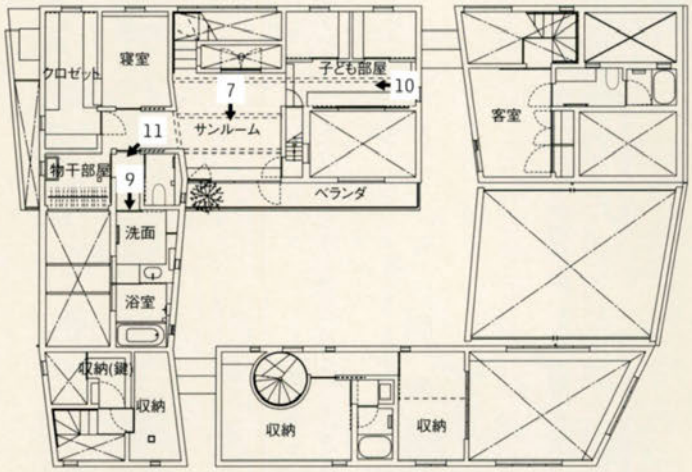
平面図

0 1 2m

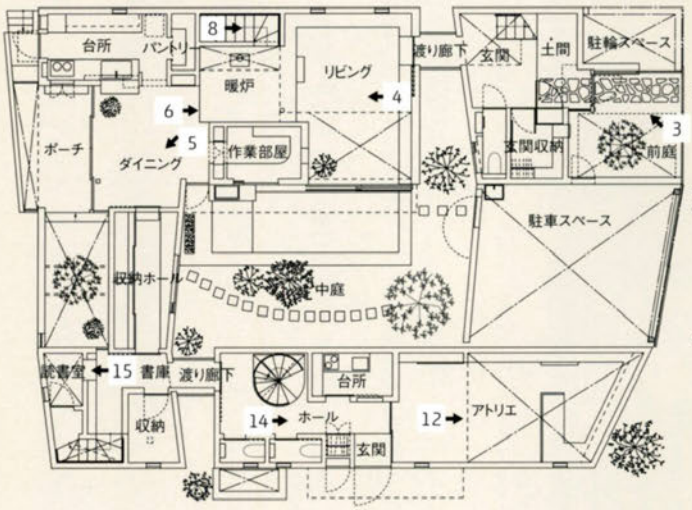
RF



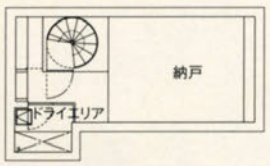
2F



1F



B1



平面図内の番号は、写真の番号と対応。撮影位置と方向を示しています。

設計

木村吉成＋松本尚子

建物名

「K」

ビルのリノベーションのようなレトロなたたずまい。竣工して1年しかたっていないのに、まわりの環境に溶け込み、すでに長い時間を内包しているような落ち着いた印象は、この建築のどこから生まれるのだろうか。

取材・文／富井 岳　写真／傍島利浩

ケーススタディ

ときには町工場のように

写真左右／3本のグレーの帯は単なるデザインだろうか。1階の腰壁の高さは約1,100㎜、幅は270㎜。突き出し窓の縦格子と窓枠は一体で、窓枠幅は30㎜。

この建物の奥行きいっぱいまでは計画道路内。だからその奥に高層マンションが立っている。入り口わきに植樹されたピンオークをはさんで私有地と歩道がなめらかにつながる。

すでに施主の手で改造された部分もあるが、どこが改造されたのかわからない。許容度の大きい建築。らせん階段が生む3階から1階への旋回運動は想像以上にスリリング。

1階ギャラリーショップ

「『好き』ってどういう意味だか知ってますか。子は男のこと、だから女と男がひとつになって『好』。陰と陽、相反するものが一緒になって『好き』になるのよ」

台湾観光に夫婦で出かけ、台北の下町、龍山寺の子宝観音の前で、ガイドの張さんから聞いた説明が新鮮で、頭に残った。

それから4日後、私は「K」の取材で大阪へ向かった。

「K」の建築家、木村松本さん（本当は木村吉成さんと松本尚子さんの夫婦なのだが、ふたりの漫画家の共同ペンネーム、藤子不二雄さんの例にならうことにした）は、住宅を設計するとき、「私」の土地と他者の土地のあわいに「好」を醸成したいらしい。「好」は「公」に通じるかもしれない。でもそれが「K」にどのように具現しているのか、住宅雑誌に載った写真をにらんでいてもぴんとこなかった。それよりこれらの写真には、ある種のなつかしさが漂っていた。「レトロ」なのである。発売前から注文が殺到したホンダの軽乗用車「N-ONE」は、昭和42（1967）年発売の「N360」のデザインを下敷きにしているし、昭和34（1959）年に発売されたオリンパスペンの姿かたちは、マイクロ一眼オリンパスペンとなってよみがえった。建築でも、感度のいいデザイナーなら昭和レトロに注目しないわけがない、と踏んだ。

リノベーションのような

大阪。地下鉄の出口から現地まで幹線道路をタクシーで走る。同行の編集者が取材前「控えめな町工場のようだ」と評した「K」は、雑居ビルの街並みに溶け込み、事前に写真を見ていなかったら車はそのまま通り過ぎてしまったろう。

現場に立つ。遠目には、壁面に繰り返される帯のせいだろう、水平の流れが強く意識されたが、「K」に近づくと垂直性が高まる。どう見ても住宅には見えない。まわりから浮き上がった新築ビルでもない。すでに「K」を見ていた建築史家、倉方俊輔さん曰く、「ビルのリノベーションとしか思えなかった」。ちなみに、倉方さんは木村松本さんと同年代だ。

中をのぞくと、高い天井。銀行や町工場のリノベーションといっても通ってしまうようなたたずまいが、眼前の楼閣にはあった。「K」の間口は私の足で9歩弱の4・8m。奥行きは9・5m。ざっと1フロア45㎡。2階と3階が住居だが、合わせて90㎡強。象牙色のガルバリウム鋼板スパンドレルの縦目地に沿って上方へ眼を走らせながら、4人家族で住むには狭いかもしれないと思った。

配置図を見てもらうと一目瞭然だが、「K」は角地に立っている。建物を敷地の南側ぎりぎりに寄せて生まれた北側（正確には北東側）の空き地は、1本の落葉高木を介して歩道とつながり、入り口は木の横にある。この空き地は行き止まりの「私有地歩道」と化して横の道路とひとつながりになり、背後には高層マンションが控えていた。

2階スペアルーム4

2階スペアルーム3

天井、木毛セメント、腰壁、床など
微妙に明度を変えた
グレーを使っている。

室内の色は白ではなく、グレー。天井のグレー、木毛セメント板の地のグレー、腰壁のグレー、床のグレーなど、明度を変えた数種類のグレーで空間に落ち着きをもたらしている。

街を使う

木村松本さんが登場し、インタビュー開始。まず、こちらが一番知りたいことをたずねた。

「このビルはレトロですね。設計するときからレトロを意識していたのですか」

「そんな意識は、『K』を設計しているあいだはなかったですね」

私の質問にはおもに木村吉成さんが答えてくれたのだが、言葉を選び、ところどころで間を置く淡々とした語り口は、『悩む力』の著者、姜尚中さんにそっくりだ。

レトロというあなたの見方は許容するけれど、私たちはそんな考え方で「K」をつくってはいない。いきなりの肩すかし。

そこで第2の矢を放つことにした。彼らが住宅雑誌で述べていた「領域設定」の問題である。内と外をどうつなごうとしたのかと問いかけると、木村松本さんは「街を使う」と言った。

「街を開く」ではないよね。初めて聞く表現。街を使うってどういうこと？

「1階の天井高は入り口側の道路の横幅の『数字』とほぼ同じです」

1階の天井高は4450㎜ある。それが横の道路幅と同じなのだと言う。

「道を歩いてきてドアを開けると、その道路幅と同じスケールが垂直方向にあるから、そうすると身体感覚として外と内がスムーズにつながるんです」

うーん、それは牽強付会にすぎないのではないか。「街を使う」とは、「街の

2階スペアルーム4からスペアルーム3を見る

2階の天井高は1,980㎜と低く抑えられている。隣家と接する南側の光環境には、とくに細かな注意が払われている。

スケールを住宅の中に使う」ということなのだろうか。

1階はフィンランドの雑貨や木工作家である施主の作品を展示販売するギャラリーであり、街の仲間とイベントをやる拠点であり、施主が作品をつくり、あるいは大工仕事をするときの作業場であり、果ては、長さ3mの材木を置いておくための倉庫ともなっている。だから大きな気積が必要だ。その決め手の「数字」がビルの横の道路幅だった。

「2階の天井高1980㎜は隣家の空き地の一辺の『数字』と合わせています」

彼らは寸法、スケールと同じ意味合いで「数字」という言葉を口にした。腕を伸ばすと手のひらがついてしまうほど2階の天井は低い。外をのぞくと確かに正方形の空き地があった。

3階の天井高は2450㎜。「数字」の出所は聞き漏らした。この空間の主役はキッチンカウンター。モノリスのような物体がリビングダイニングにごろんと横になっている。でも空気は少しも重苦しくない。既製品のシンクをこのように改造したのは施主だという。器用な人だ。

インタビューは最初、この3階のダイニングの椅子に座って行った。

「ここは家族がご飯を食べたりテレビを見たりするので、椅子座の生活なんです。椅子に座ったとき、首から下に腰壁が来るように袖壁の高さを決めました。腰壁をまわすことで守られているという安心感があります。首から上は外の景色が見渡せます。細かいことですが、窓越しに隣家の鬼瓦の屋根が自分の家の延長のように延びています。2階は、床に座ったときの視線の抜けを考えて、首から下の高さに腰壁をまわしてあります」

腰壁の高さが各階で違うのにはわけがあったのである。

木村松本さんが「街を使う」というとき、どうやらふたつの「使う」があるらしい。

ひとつには借景の鬼瓦屋根のような直接的な使い方、これはほかの建築家も日々やっていることである。もうひとつは、街の「数字」を内に取り込む場合。「K」の住人は、文字通り「街の中に住む」ことになる。家の中にいても、街のスケールを日々体感しているのだから。このような思考法の建築家を私はほかに知らない。街は都市のスケールから戸建て住宅のスケールまで何段階ものスケールの地層からできている。そして都市と住宅のスケールのあいだには深くて暗い溝があると思っていた。

「彼らは都市のスケールの一部を住宅の高さ方向に採用することで、いわば都市と住宅のスケールを入れ子にしようとしているのではないか」と、くだんの倉方さんは分析した。なるほど。

このあたりの街並みを観察すると、道路沿いには2、3階建ての建物が軒を連ね、その奥に高層ビルが立っている。幹線道路から10m奥までは計画道路なのだ。建築家は、この街並みの特性を読み込んで、立ち座（この座はギルドという意味）、床座、椅子座の3つの異なった空間を重ねている。街は垂直方向がおもしろいと木村松本さんは言う。だって街では高さ方向でどんどん外の景色が変わるから。施主とこの敷地を見たとき、3層目は外が「スコーンと抜けて見渡せる」と建築家は直感したそうだ。

「計画道路ゆえの環境の特性を考えて設計していると、途中から生活スタイルの違う3棟の平屋を設計しているように思えてきたんです。『積層する平屋』。均質空間が重なっているのではなくて、景色の異なった平屋が積み上がっているというイメージ。1階フロア、2階フロア、3階フロアではなくて、1階敷地、2階敷地、3階敷地という感覚なんです」

倉方さんは、この「積層する平屋」を「3つのパラレルワールド」と表現したが、このパラレル感を強めているのが、肩幅より広めのらせん階段と、別世界への入り口としての床穴だ。3層を串刺しにする上昇下降の旋回運動は意識の切り替えをもたらしている。

生活を豊かにする「数字」

3階から1階へ、らせん運動の末に下り立つと、足下には厚さ1・2mのコンクリートのかたまりが埋まっている。そのべた基礎の立ち上がりが腰壁となる。木村松本さんは起き上がりこぼしの重りのようなものと形容したが、このコンクリートボックスは軟弱地盤の泥海に浮いている不可視の箱船なのだ。箱船の側壁からは1800㎜ピッチ（一部2300㎜ピッチと1200㎜ピッチがあるが）で75㎜角の角鋼が約10mの高さまで突き出している。こ

天井高は2,450㎜と、住宅の天井高としては普通。都市居住にもかかわらず南北方向への視線の抜けがいいのは、計画道路内という敷地条件を設計に反映させたから。

3階ダイニング方向を見る

椅子に座ったとき、
首から下に腰壁が来るように
袖壁の高さを決めた。

突き出し窓

隣家の鬼瓦屋根が借景となり、はるか向こうまで視界が開けている。突き出し窓は網入りガラスと縦格子で視認性を落とし、相対的にフィックスガラスの心理的な透明性を高めている。

れが構造の柱だが、あまりに細く心細い。そこは1階の腰壁にも協力してもらい、さらにブレースを入れて座屈をまぬがれているらしい。柱梁構造ですか、と問うと「ブレース構造」という答えが返ってきた。構造設計は、佐々木睦朗さんのところにいた満田衛資さん。3人はほぼ同い年なので同じ文化的空気のなかで生きてきたことになる。木村松本さんはほとんどのプロジェクトを満田さんに相談するそうだ。それにしても75㎜角鋼は構造体としては弱々しすぎないか。「K」の室内には、真壁でこの角鋼が現れている。

「構造材のスケールは『生活』に大きな影響をおよぼしているのに、間仕切り壁や家具のスケールと切れているんです。だからといって構造材を壁の中に隠してしまおうというのではなく、僕らは構造材のスケールを『生活』のスケールになじませたい。構造材と間仕切り壁と家具の寸法にヒエラルキーをつけず、『生活』のなかに構造材が参加できる状態にしたい。75㎜という数字は、そこの間仕切り壁の『数字』と同じです」

真壁に納まった角鋼は壁枠のように見える。試しに私は毎日触れている自宅の木のテーブルの幅を測ってみた。天板の厚さ40㎜、天板と接合している脚の幅が70㎜。確かに木村松本さんが選択した75㎜という寸法は、家具の寸法なのだった。

それで思い出すのは、伊東豊雄さんの「桜上水K邸」(2000)だ。この住宅の構造材はすべてアルミニウム合金で、柱は70㎜角のカバー材で覆われ、一部はサッシの縦枠も兼ねている。「構造材、仕上げ材、サッシなどとのあいだでの……ヒエラルキーが消失し、構造材の存在が希薄になっていくにしたがって、建物はより抽象的に、そしてライトになっていく」と設計趣旨にはある。考え方の前半は木村松本さんと同じだが、後半はベクトルが違う。

「K」の室内の壁は2段階構成である。250㎜あるいは270㎜の分厚い腰壁と、その上にのっている約107㎜の薄壁。西面構造図には、ブレースをまとった2段階構成の裸形が描かれている。住宅の壁厚は普通150㎜や180㎜だから、「K」で使われたふたつの壁は、より薄く、あるいはより厚い。この落差が窓ガラス越しに実感できることで、分厚い腰壁からは守られているという感覚が生まれ、目の粗い木毛セメント板の薄壁からは外とのつながりを感じる。もちろん無意識に、だ。分けることとつなぐことが対比・併存している。彼らは、柱をどこまで細くできるか、壁をどこまで薄くするかということ自体には興味がないという。あくまで、日々の「生活」を豊かにするための「数字」を探しているのだ。

3階リビング方向を見る

3階の主役は一直線に延びるキッチンカウンター。キッチンカウンターも、その横の食器棚も、建築家と相談して施主が手づくりしたという。

対比と併存

続いての発見は室内の色。木村松本さんは、室内に白を使うことを注意深く避けている。

「室内は明度を変えて3種類のグレーを使っているんです。天井のグレー、木毛セメント板の地のグレー、そして角鋼の柱と間仕切りのグレー、微妙に明度を違えています」

帰り際、3階の木の床もよく見ると淡いグレーだった。グレーの塗料で拭いたという。明度の違うグレーを何種類か使うことで、空間に深みが備わるように私は感じた。

話は一巡して話題は再び「領域設定」である。これが具体的に表れるのは、なんといっても1階の壁と窓の処理だ。大人のへそより少し高い腰壁は住宅の中と外を明確に分けている。しかしその腰壁の厚みのせいで、窓辺に色とりどりのカップを置いて通りの人の目を引いたり、ちょいと垣根越しの立ち話といった風情で、お互いに腰壁にもたれかかっておしゃべりすることだってできる。この腰壁は、分けるだけでなく内と外の心理的距離を近づける役割も果たすのだ。ここにも対立する機能の併存が見てとれる。次に、腰壁の上にのせたガラスである。いきなり突き出し窓ではない。あいだに300㎜のフィックスガラス。なぜか。

「ガラスは透明だけれど透明ではないんです」

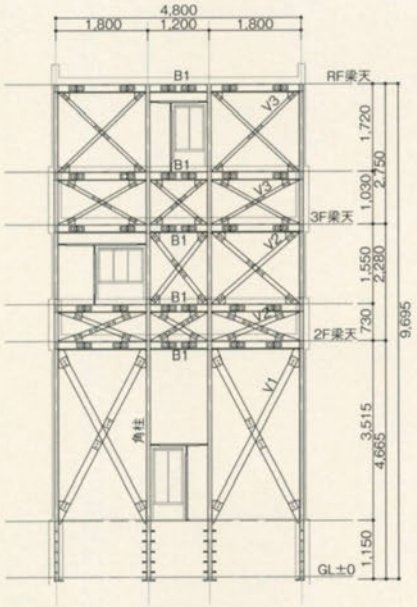
突き出し窓は、網入りで透明度を落とし、その上に縦格子をかぶせて視認性をさらに下げる。すると相対的にフィックスガラスの視認性が高まる。そして突き出し窓の窓枠の幅は30㎜。既製サッシならその倍以上になる。通称「鍛冶屋」でつくったこのステンレスの窓枠はプロダクトに近い。幅270㎜の腰壁と突き出し窓の30㎜窓枠の厚みの対比。そして突き出し窓とフィックスガラスの視認性の対比。二重の処理でフィックスガラスからはガラスの存在感が消え、心の目にはただの隙間と化してしまう。こうして街行く人たちは気軽に腰壁の垣根から他人の庭をのぞきこめるのだ。ここにも対比と併存がある。

「K」は人に垂直性を強く意識させる。垂直方向のおもしろさを街の人に気づいてもらおうと思ったと建築家は言う。だから縦方向へ視線をいざなうという考え方が縦格子や板金屋に特注したスパンドレルという形に結実したのであって、その逆ではない。

街にある古風な壁や窓のデザインを引用しても、はりぼてはすぐにわかる。生まれながらに豊かな「時間」を内在化させているという意味で、この住宅は建築としてはまれな存在である。

1/150

西面構造図

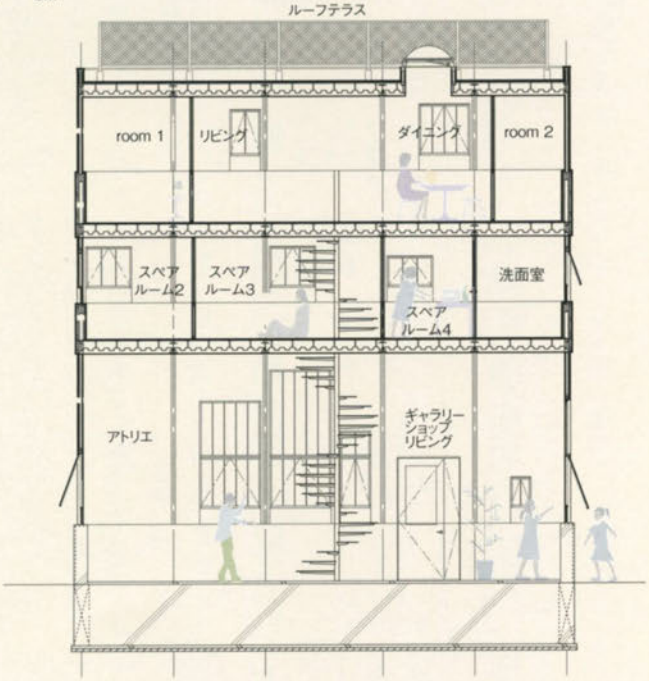


ブレース構造。2階、3階のブレースは、それぞれ2段階構成になっていることが読みとれる。下が腰壁用、上が薄壁用。

角柱:■-75×75
B1:H-150×75×5×7
V1:FB-6×140
V2:FB-6×90
V3:FB-6×65

1/150

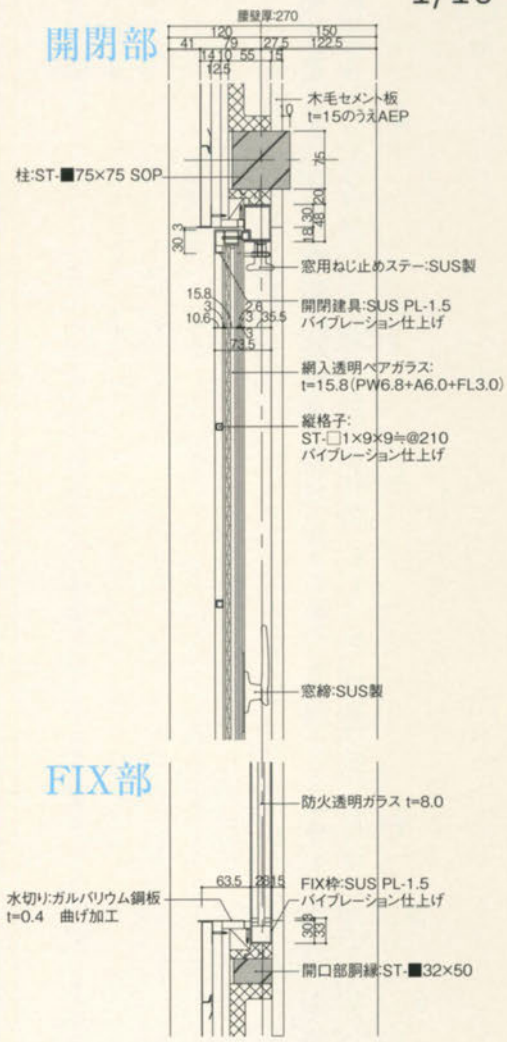
断面図



おもな作品／「つつじ(2009)、「4」(11)、「mina」(12)、「シノ」(12)「泉北ほっとけないネットワーク住環境整備プロジェクト」(10〜大阪市立大学と協同) など。

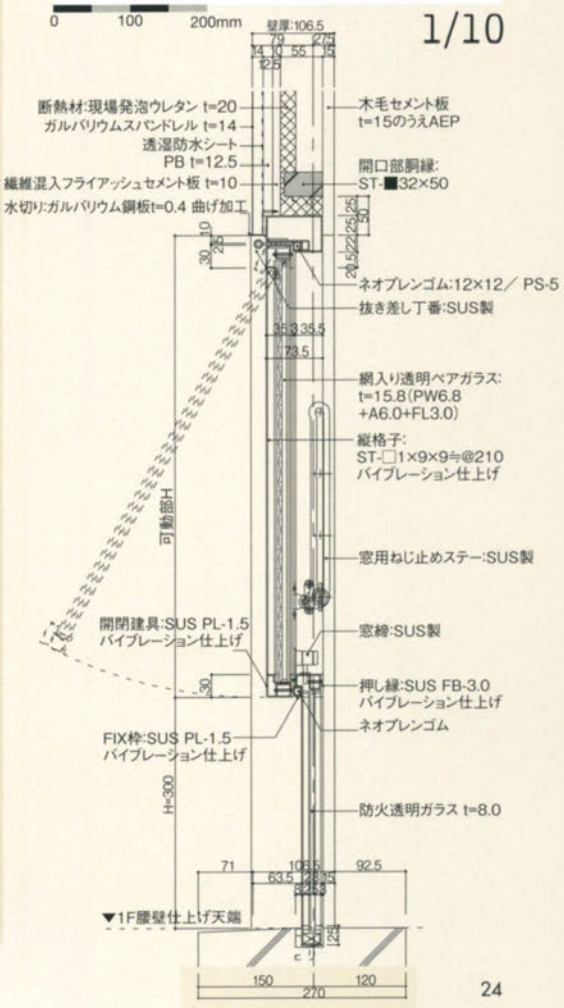
開口部平面詳細図

0 100 200mm 1/10



開口部断面詳細図

0 100 200mm 1/10



「K」

北側全景。

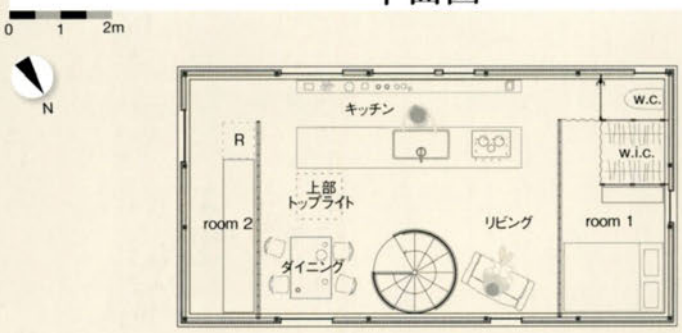
建築概要	
所在地	大阪府大阪市住吉区
主要用途	ギャラリー+アトリエ+住宅
家族構成	夫婦+子ども2人
設計	木村吉成+松本尚子／木村松本建築設計事務所
構造設計	満田衛資構造計画研究所
施工	コハツ
敷地面積	75.71㎡
建築面積	45.60㎡
延床面積	136.80㎡
階数	地上3階
構造	鉄骨造
設計期間	2009年4月～2011年6月
施工期間	2011年7月～2012年2月

おもな外部仕上げ	
屋根	耐水合板t=12+12㎜
	珪酸カルシウム板t=12㎜
	アスファルトルーフィング張り
外腰壁	モルタル金ごて仕上げ
	t=15㎜撥水材
外壁	ガルバリウム鋼板スパンドレル
	t=14㎜
開口部	製作ステンレスサッシ
外構	コンクリート平板敷き 植栽

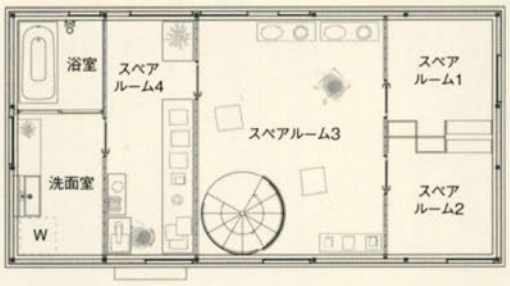
おもな内部仕上げ	
1階(アトリエ・ギャラリー・ショップ・リビング)	
床	モルタル金ごて仕上げt=50㎜
腰壁	コンクリート モルタルしごき仕上げ
壁	木毛セメント板t=15㎜ AEP
天井	PBt=12.5㎜ AEP
2階(スペアルーム1・2・3)	
3階(リビング・ダイニング・キッチン・room 1・room 2・W.I.C)	
床	パーケットフローリングt=15㎜
	ウッドワックス
腰壁	モルタル金ごて仕上げt=15㎜
壁	木毛セメント板t=15㎜ AEP
	アクリル板t=3.0㎜
	またはシナ合板t=5.5㎜
	木製格子□9×9@210㎜ OP
天井	PBt=12.5㎜ AEP
厨房機器本体	
	製作:モルタル金ごて仕上げ
	撥水材
スペアルーム4	
床・腰壁	モルタル金ごて仕上げt=15㎜
壁	木毛セメント板t=15㎜ AEP
	アクリル板t=3.0㎜
	またはシナ合板t=5.5㎜
	木製格子□9×9@210㎜ OP
天井	PBt=12.5㎜ AEP
洗面室	
床	パーケットフローリングt=15㎜
	ウッドワックス
腰壁	モルタル金ごて仕上げt=15㎜
壁	木毛セメント板t=15㎜ AEP
	アクリル板t=3.0㎜
	またはシナ合板t=5.5㎜
	木製格子□9×9@210㎜ OP
天井	PBt=12.5㎜ VP
浴室	
床	モルタル FRP防水
壁	耐水合板t=12+15㎜ FRP防水
天井	珪酸カルシウム板t=6+6㎜ VP

1/150

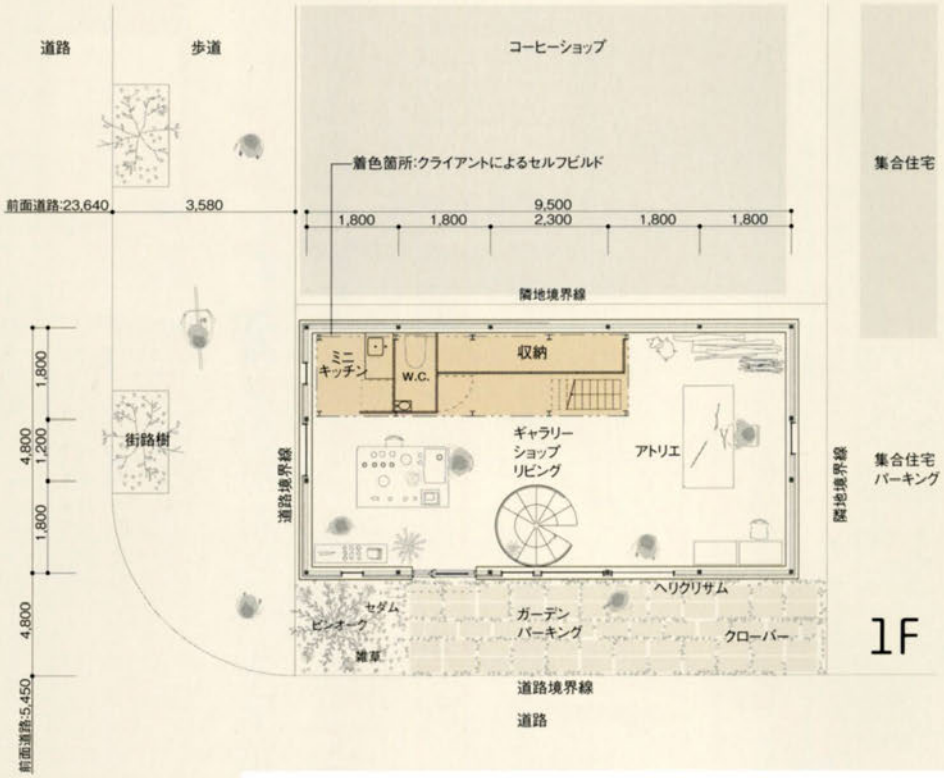
平面図



3F



2F



1F

木村松本建築設計事務所

木村吉成 Kimura Yoshinari

1973年和歌山県生まれ。96年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業。97年同大学根岸研究室研究生、97～98年狩野忠正建築研究所、2003年木村松本建築設計事務所設立。09年より大阪市立大学、大阪工業技術専門学校非常勤講師。

松本尚子 Matsumoto Naoko

1975年京都府生まれ。97年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業。99年同大学根岸研究室研究生、2003年木村松本建築設計事務所設立。09年より大阪市立大学、11年より滋賀県立大学非常勤講師。

写真左右／ほの暗いなかで、突き当たりにある光壁（写真左）や通りに面した窓からの光が、天井のガラスに映り込んで増幅。明暗の印象が強調される。

過去と現在が遭遇する場

設計　永山祐子

建物名　「カヤバ珈琲」

100年近くの時間を受け入れ、谷中の街にたたずむ町家。ただ、そのまま保存するのではなく、その空間に触発されたものを、新たに吹き込むことで、誕生した空間。なつかしさと新しさの融合をみる。

取材・文／加藤 純　写真／川辺明伸

ケーススタディ

谷中の辻に立つカヤバ珈琲の建物は、間口2間・奥行き5間の寄棟造、総2階建て。街角のランドマークとなっている。

東から見た全景

上26
スカイツリー経由
亀戸駅
KAMEIDO STA.
ノンステップバス
Coffee
カヤバ
コーヒー

扉のディテール

出入り口のガラス入り木製扉や、木枠のガラス窓は既存のものを使用。看板などとともに、昭和の香りを醸し出している。

外の景色が黒ガラスの天井面に映り込むとき、外が明るいと映像はカラフルになり、光が弱いとモノクロ気味になる。

100年の時間の堆積に新しい要素を組み合わせ活性化させた

多くの寺が点在し、郷愁を誘う街並みが続く、東京の谷中。散策路として人気のこの界隈で、交差点の角に「カヤバ珈琲」はかわいらしくたたずんでいる。木造2階建てで、出桁造の軒がまわる町家は大正5（1916）年築。板張りの外壁はすっかり焦げ茶色になり、100年近くの時間と空気を沈着してきたかのような趣を醸している。この建物に新しい要素を組み合わせて活性化してよみがえらせ、周辺の街にも一石を投じたのが、永山祐子さんの再生計画である。

この建物は、ミルクホールやかき氷店などを経て昭和13（1938）年よりカヤバ珈琲として営業していたものが、2006年に閉店。その後NPO法人たいとう歴史都市研究会が借り受け、SCAI THE BATHHOUSEの協力のもと、谷中を新しい文化の発信地とするプロジェクトの一環として喫茶店を再生することになった。再生計画を依頼された永山さんは、すでに熟成されなつかしさの香る建物を、どのようにとらえ直して活用するかという命題に直面する。

「ノスタルジックな要素を拾い上げるよりも、空間のもつ特性を拡大解釈して見せることで、今の時代に合う別のストーリーが浮かび上がってくるのではないか」と永山さんは考えた。一般的には建物の保存活用というと、様式や使われている部材の特徴、その背景などを掘り起こし、復元したうえで余すところなく説明することに終始しがちである。しかし、永山さんは特定の様式や建材についての考察はあえて脇に置き、この場で生まれている、光の明暗のコントラストという現象と特性に着目した。

光の明暗がつなぐ時間

ガラス戸を開けて中に入ると、ほの暗さを感じるコーヒー色の内装に囲まれる。横に連なる窓の外に広がる通りの景色は、日中はまぶしく感じるほどだ。「薄暗い室内と、窓から見える通りの明るい風景という明暗の差が強く印象に残った」という永山さん。永山さんは、昔の日本の民家で暗い室内から明るい庭を眺めるのに似た感覚を抱いている。この光のイメージを増幅させるために用いたひとつのツールが、天井面の黒いガラスと入り口正面にあるガラスの光壁である。店内奥に白い光の面があることで、室内と外の明暗のコントラストはいっそう強調され、来店者の気を引くポイントのある空間に一変。そして、この面が窓と同列に感じられることで、この面から外に抜けていくような感覚が生まれている。乳半シートを張った高透過ガラスのまわりにスチール板の薄い縁をまわした光壁には、調光機能付きのランプが仕込まれた。窓の外と同じ程度の明るさになるよう、時間や天候に応じて喫茶店のスタッフに随時調整してもらっているという。

小ぶりで低い椅子の座面に腰を下ろすと気づくのは、白い光壁や窓から見える景色が、黒く光沢のある天井面に映り込んでいることである。さらに注視すると、半透明の黒い面を通して天井裏が見え、一部では2階の天井まで見えてくる。これは、既存の天井面をはがしたうえで黒いガラスを挿入しているため。外の光が強く明るいと窓からの景色は黒ガラスの天井面にカラフルに映り、光が弱いとモノクロ気味に映り込む。そして、2階の半畳分の床が抜かれアクリルの厚板に替えられていることで、2階の天井まで透けて見える。黒ガラスは、窓の外と室内の映像を面に映しながらも適度に透けるように、スモークグレーのフィルムを張って調整された。

客席テーブルの黒い天板は、もとのテーブル脚を残しながら新たに付けられたもの。永山さんは上に向かって斜めにテーパーをつけることで、シャープに見えながらもしっかりと厚みを感じる造りとした。テーブル上面は大きな面積で光を反射するため、窓や光壁の光を表層で強めている。古い空間に取り入れた光壁と黒ガラスの天井面、

1階客席から通りの開口部を見る

鈍く光る黒いテーブル面のあいだで、まるで音が響きあうように互いに光をやりとりしているかのようだ。

光を直接扱う面以外にも、この空間には光や色について細やかな配慮が見られる。たとえば、カウンターの壁面にはさまざまな色やテクスチュアの塗料を重ねて、壁に光の影がまわり込んでいるような陰影をつける特殊塗装が施されている。カウンターの下部には既存のレンガ積みと、それに合わせて色を補正したレンガタイルを使用。床のモルタル金ごてならしの面とともに、落ち着きのあるトーンを保っている。客席テーブルの上には、スチールの角棒とワイヤーで張り出したシンプルな照明器具を製作して設置。再生後に始まった夜間の営業時にも、必要にして最低限のあかりが得られている。

なお、昭和喫茶の雰囲気を伝える黄色い看板や椅子、食器などは以前のものを引き継いで使用している。店主の住居として使われていた2階は、スチール板の本棚や照明器具を新設し、壁を漆喰で塗り直したほかは、和室の続き間をそのまま残した。再開当初は打ち合わせスペースとして使われていたが、現在では床座の客席にされている。日差しの多く入る明るい座敷は、1階とは別世界といってよい。畳が置き換えられたアクリル板を通して、1階とのつながりが感じられる。

再発見と新解釈の先に

永山さんはカヤバ珈琲の後に、愛媛県宇和島市の木屋旅館の再生など、日本的な建物をリノベーションするプロジェクトにかかわっている。「すでにそこにある歴史ある空間には、さまざまな情報がたくさんあります。なるべく手をつけずに些細なきっかけを与えるだけで、空間の違った側面が見えてくるようにしたい」と語る。おもしろいと感じたことを発見して増幅させることで、全体の見え方をガラリと変えるというのが永山さんの目指すアプローチ。カヤバ珈琲では、光のコントラストという知覚現象の再発見と解釈を通して、空間がもつ本質的な特性を引き出すこととなった。

「街では時やストーリーが積み重なって混沌としてきたときに、複雑さが心地よさや落ち着きに変わることがあります。これまで自分が新規に設計するプロジェクトではミニマルに整理された世界観をつくってきましたが、決して心地よい空間かというと、そうではない場合もありました。最近では複雑なものがとても魅力的に感じられて、それらをどう扱っていくかを考えています」と永山さんは語る。

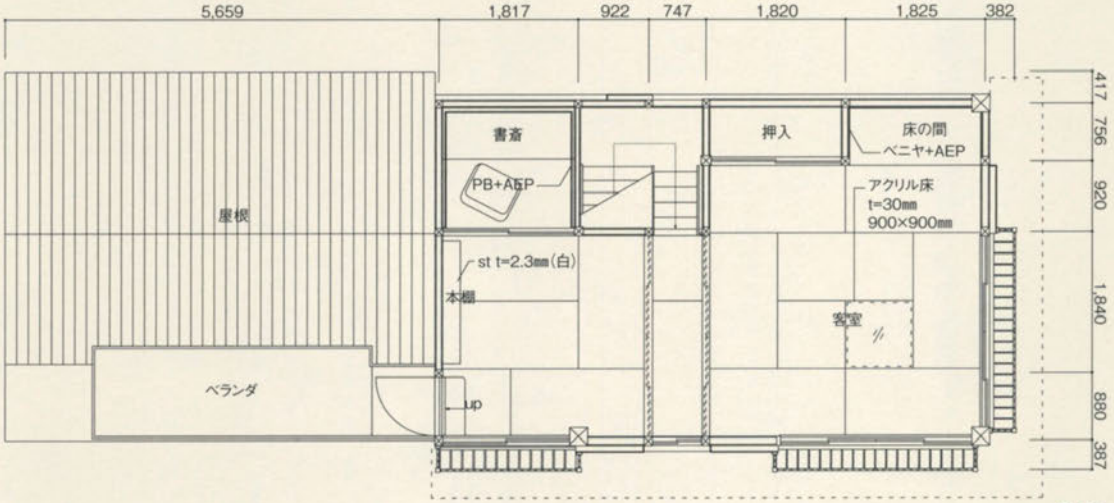
光が重なり反復する店内で過ごすと、年月を経過した柱や梁の表情のなかで、人や車の行き交う通りの往来と店内の人の様子が、天井ガラスやテーブルに映り込んで重なって見えてくる。過去と現在、未来的な要素が渾然一体となり、時間や空間について普段感じている意識が広げられるようだ。このカヤバ珈琲の空間は、来訪者の意識を転換する装置になっているといえる。

写真右／元の和室を残した2階。左／半畳分をアクリル板に置き換えて1階と視覚的につながる。

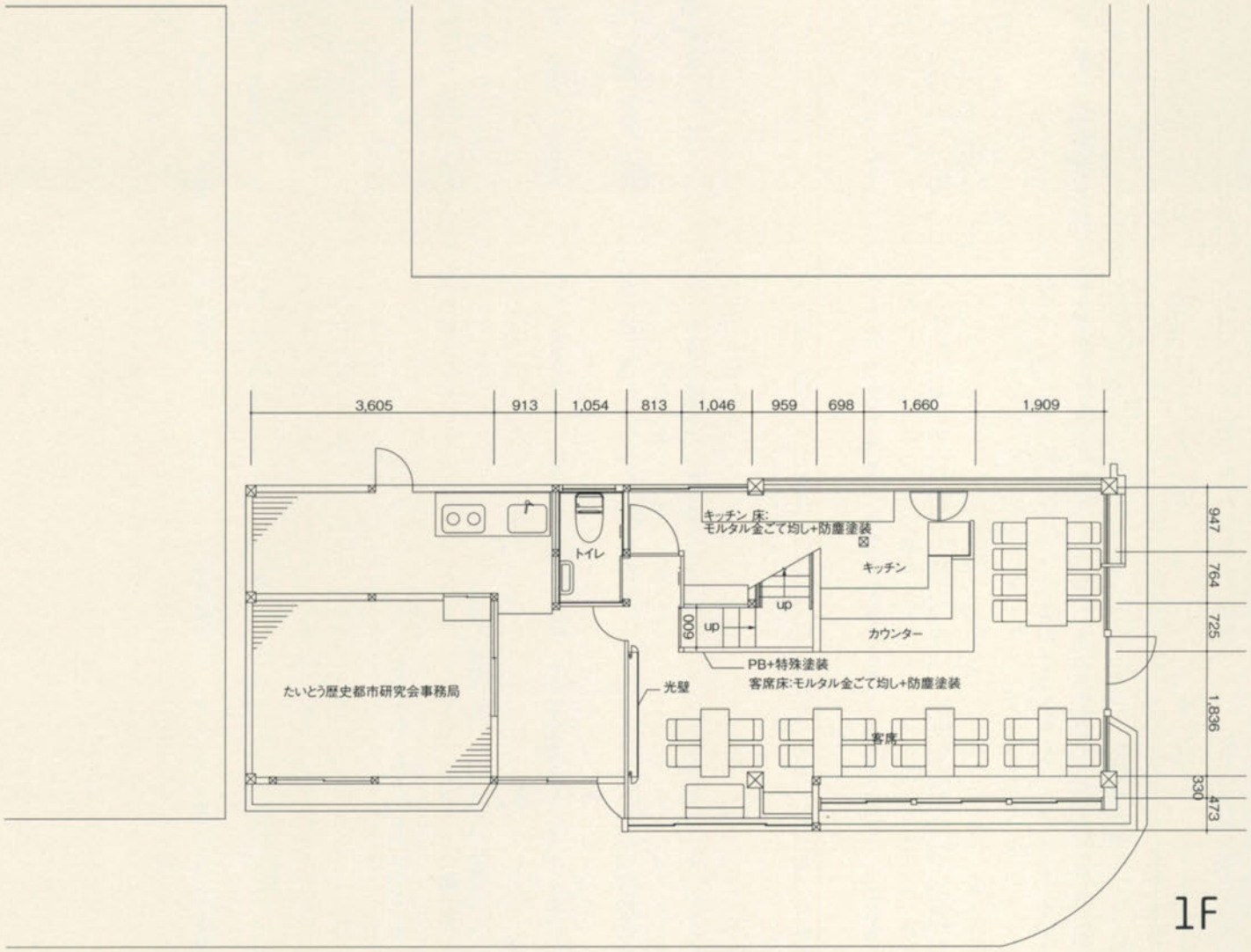
平面図

1/100

0 1 2m



2F



1F

東側全景。

カヤバ珈琲

リノベーション

建築概要	
所在地	東京都台東区
主要用途	飲食店(喫茶店)
設計	永山祐子／永山祐子建築設計
施工	丹青TDC
敷地面積	73.05㎡
建築面積	57.78㎡
延床面積	86.74㎡
階数	地上2階
構造	木造
設計期間	2009年5月～8月
施工期間	2009年8月～9月

おもな内部仕上げ	
1階	
床	モルタル金ごて均し 防塵塗装
壁	既存部分：塗装
	新規部分：ニヤトウベニヤ染色 PB塗装
	カウンターまわり：PBt=12.5㎜ 特殊塗装
	カウンター下：既存煉瓦(一部補修)
	カウンタートップ：人工大理石
	光壁：高透過ガラスt=8㎜ 乳半シート両面張り
天井	スモークガラスt=8㎜ グレーフィルム張り
	まわり縁　竿縁：スプルス塗装
2階	
床	畳、一部アクリルt=30㎜
壁	既存部分：漆喰
	床の間：ベニヤ2枚張り AEP
	書斎：PBt=12.5㎜ AEP
天井	既存

永山祐子

Nagayama Yuko

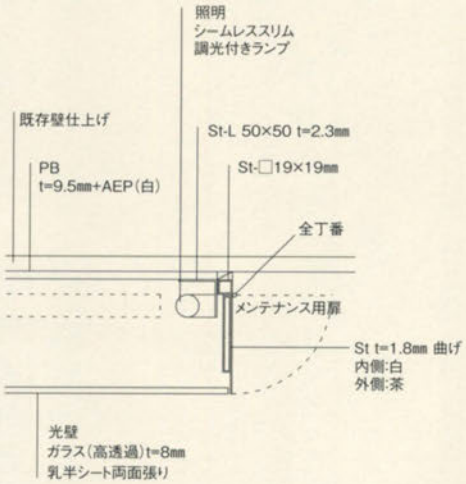
1975年東京都生まれ。98年昭和女子大学生活美学科卒業。98～2002年青木淳建築計画事務所。02年永山祐子建築設計設立。現在、東京理科大学、京都精華大学非常勤講師。おもな作品／「CAST」(03)、「LOUIS VUITTON 京都大丸店」(04)、「丘のある家」(05)、「東屋」(07)、「LLove」(10)、「木屋旅館」(12)など。

1/10

光壁平面詳細図

0　100　200㎜

乳半シートを両面に張ったガラス内側にランプを仕込み、ライティングボックスのようにしている。

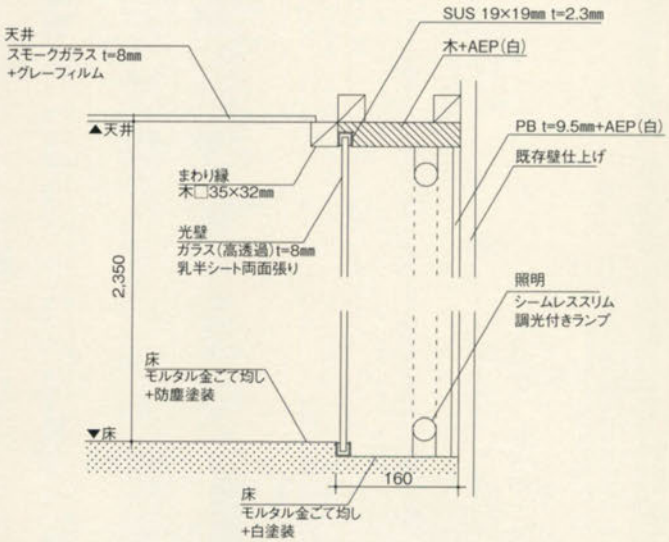


1/10

光壁断面詳細図

0　100　200㎜

ガラスを留める上下の枠まわりは正面からは見えないように隠され、存在感が出ないようにされている。



写真右／2棟に分離する中庭を見上げる。広さは6畳ほど。シラキなどが植えられ、隣家とを仕切るネットにはツタ類が繁茂する。左／道路に面する東側外観。切妻の家型が奥へと延び、左上には物見塔が見える。軒はスチールプレートにアスファルトルーフィング・シングル葺き。大きな開口が2層にわたって設けられている。

時の流れに押されない

設計　塚本由晴+貝島桃代

建物名　「スプリットまちや」

今の時代の町家とは何か。アトリエ・ワンは新世代の町家を東京で試みる実験をしているという。そこに時代を超えた普遍性をもみることができるのか。塚本由晴さんに話を聞いた。

話し手／塚本由晴　聞き手・まとめ／豊田正弘　写真／藤塚光政

特集／やわらかなデザイン その4

Special Feature
Nostalgic
Design ?

インタビュー

階段からダイニング、中庭を見下ろす。ダイニングは約4畳半とコンパクトながら、中庭との強い一体感を醸し出す。渡り廊下は巨大なベンチのようにデザインされた。

1階ダイニング

建築の形が培ってきた知性

―― 今回の特集は、「なつかしいデザイン」というのが基本にあります。塚本由晴さんより若い世代で、そうしたものにすごく関心をもっている人たちがいる。アトリエ・ワンのデザインがそれと共通項があるとは思いませんが、ある時代の流れのなかにあるのではないでしょうか。

塚本由晴 私は基本的に、古いものとか、名もないものがすごく好きなんです。バナキュラーな建築とかね。それらは、まず形ありきではなくて、いろんな知恵や配慮をバランスさせた結果として、ああいう形になっている。そのバランスさせるところが、知性といえる部分です。建築をつくるときにはいろんなことを同時に処理しますが、それをまとめた形が歴史的につくられてきた。それを「家かビルか」という外形に力点を置いて語ったのがポストモダンだと思う。

―― この家の屋根も、ポストモダンとは違いますよね。

塚本 そうですね。スタイルではなく、屋根がもつ知性を、どうやって現代のコンテクストのなかで生かすかに関心がある。「近代が箱だったから、それに対抗して屋根をつけます」という、リアクションではない。たとえば屋根は、雨の勾配、日差し、断熱、内部空間、構造と、いろんなことを同時に均衡させた結果としてこうなっている。その一つひとつ情報を取り出せば情報だけれど、それを統合する、まとめて均衡させるというのは、それより一歩踏み込んだ知性というものなんです。建築設計で楽しいことのひとつはそういう歴史的に培われてきたものに、現代を重ねられるところですね。それにより、時間的な広がりをもてるし、昔の人が考えたことを追体験できるし、人間がずっとやってきたことのおもしろさを自分のものにできる。そういうのが好きだということが、最近だんだんとはっきりしてきました。

―― 切妻の屋根を選んだ意図はどういうものですか。

塚本 まずは北側斜線をかわすためです。加えてこういう小さな空間をつくるときには、建築らしい形、家らしい形を堂々と示した方がいいのです。

―― それを薄くしているのはなぜでしょう。

玄関

敷地に高低差があるため、
玄関は地下レベルにある。
天井高は2,100㎜。

塚本 軒を出したいのですが、その破風が分厚くなると、今のものにならない感じがする。小さい家ではそのへんは気合いを入れないとダメだと思って、ちょっとピリッとさせています。基本的につつましくつくっていますが、中庭のガラス屋根や庇くらいは……。

―― 樋もすごくきれいです。

塚本 ええ、銅の樋のディテールとか、そういう縁のところだけにお金をかけています。後は基本的に丁寧につくることを心がけて、特別なことはしていない。妻壁の内側は白い漆喰塗りや銅板葺きにして、形というより雰囲気の違いを出しています。

故郷の感覚からなつかしさへ

―― アトリエ・ワンの住宅を拝見すると、理論がむき出しで表現されることはなく、いつもかわいらしさや親しみやすさを感じます。そのあたりの感覚はいかがですか。

塚本 私の場合、なつかしさにあまり抵抗がないというのもあるんでしょうね。日本の建設業界が今までやってきたのは、故郷を壊してお金に換えることだったのではないかと思います。私の出身は茅ヶ崎ですから、そんなに田舎ではない。子どもの頃に遊んでいた環境は、空き地は誰かが管理していたし、住宅と隣りあった畑も手入れがされていて、どこまでも人の手が入っていました。つまり、自分の身体感覚の連続で理解できる、人の手の入った世界がずっとつながっていたわけです。故郷という感覚には、環境がどのようにできているかが欠かせない条件です。その感覚が、なつかしさを違和感なく受け入れることにつながる。私は民芸も大好きで、モダンデザインとして見るとダメでも、いいものはいっぱいあります。

―― 日本の民芸陶器は、もともとは英国のストーンウェア（炻器）ですよね。

塚本 それは日本も英国もお互いに学んでいるから、ユニバーサリティがある。人間があまりあちこち動きまわらなかった時代に、じっとその場で考えてつくりあげたものがもつ、よさを感じます。

外観の家型が室内にも現れる。左右の間口幅は2,730㎜。左上のドーマ窓からは自然光が降り注ぐ。妻壁の仕上げは、手前が銅板葺き、奥が白い漆喰塗りとなっている。

2階寝室2から納戸を見る

―― 根本のところで、なつかしいよさはあるのだと思います。親しみやすさを、どこかでみんな感じたいんじゃないかな。

塚本 そうですよね。

―― ここの銅板を張った壁も、ステンレスやガルバリウムの光り輝くのとは違って、木とのなじみとか……。

塚本 あそこは暖炉とか薪ストーブを入れたかったんですが、周囲のことや予算もあって、やめました。でも、まちの真ん中で、家のなかに火があることにはずっと関心があって、中庭に炉を切る案もありました。結局、ここの裏側はキッチンだからファイヤープレースとみなして、火に近い金属として銅（あかがね）を使いました。不思議なもので、人間は銅からどこか熱を感じる。調理のイメージは、ステンレスより銅のほうが強いんですね。

―― ある世代から上の人にとっては、暖炉は古くさく感じます。これはモダンではない、とか。

塚本 ああ、そうでしょうね。それによって、自分のアイデンティティの境界線をピッと引く。そういう指標のひとつとして、暖炉とか、家の形とか、なつかしさとかがあったわけです。

新世代の町家をつくる試み

塚本 日本の近代の建築家は、民芸運動とうまくいかなかったんです。民芸の人たちは建築家と話が合わないので、結局、自分たちで古民家を移築したり、自分なりに民家調につくるという形で展開する。10年遅れでやってきた篠原一男初期の木造住宅が、民芸運動と接続する可能性を示したぐらいです。

―― 若い人たちから話を聞くと、昭和初期のものを好きな人が多いですね。

塚本 やはり社会が上向きで、日本の古いものに対するセンスがまだ死んでいなかった時代ですよね。私も好きです。町家なんか大好きで、この住宅も町家と呼んでいます。

―― 塚本さんは、新世代の町家の定義として、「家の外で暮らす機会がある」を条件のひとつにされていましたが……。

塚本 本当は、道に面してそれをつくるのが理想です。ここの環境はそこで食事をしても楽しい感じではなかったから、中庭にしました。町家の「坪庭」を再解釈したり、「通り庭」の特徴を生かして、2階の窓を揃えて視線を貫通させたり……。町家がずっとやってきた「奥行きをどう使うか」というテーマは変わらないけれど、今の時代に東京で試みるという実験です。それと、「町家」と言ってしまったほうが、「まちをつくる建物」ときちんと認識できるからいい。「小さい家」というだけだと経済的な問題に回収されてしまう。

アトリエ・ワン
塚本 由晴

1965年神奈川県生まれ。87年東京工業大学工学部建築学科卒業。87～88年パリ建築大学・ベルビル校、92年貝島桃代とアトリエ・ワン設立。94年東京工業大学大学院博士課程修了。2000年より同大学大学院准教授。博士（工学）。03年、07年ハーバード大学大学院客員教授、07年、08年UCLA客員准教授、11～12年デンマーク王立アカデミー客員教授、11年Barcelona Institute of Architecture客員教授。12年京都精華大学客員教授、13年コーネル大学Visiting Critic。

Tsukamoto Yoshiharu

写真上／適度に囲い込まれ、落ち着きの感じられる空間。開口の緑は隣家のものを借景している。下／妻壁の開口位置を揃えることで、中庭、東棟を通して、道路の先へと視線が抜ける。

存在が美しいこと

―― 物見塔やドーマ窓も、なつかしさや家らしさの要素に通じているんでしょうか。

塚本 物見塔は、空気抜きであると同時に、奥さんが東京タワーを見たいと言うので、よじ上る煙突として提案したら、ぜひという話になって……。

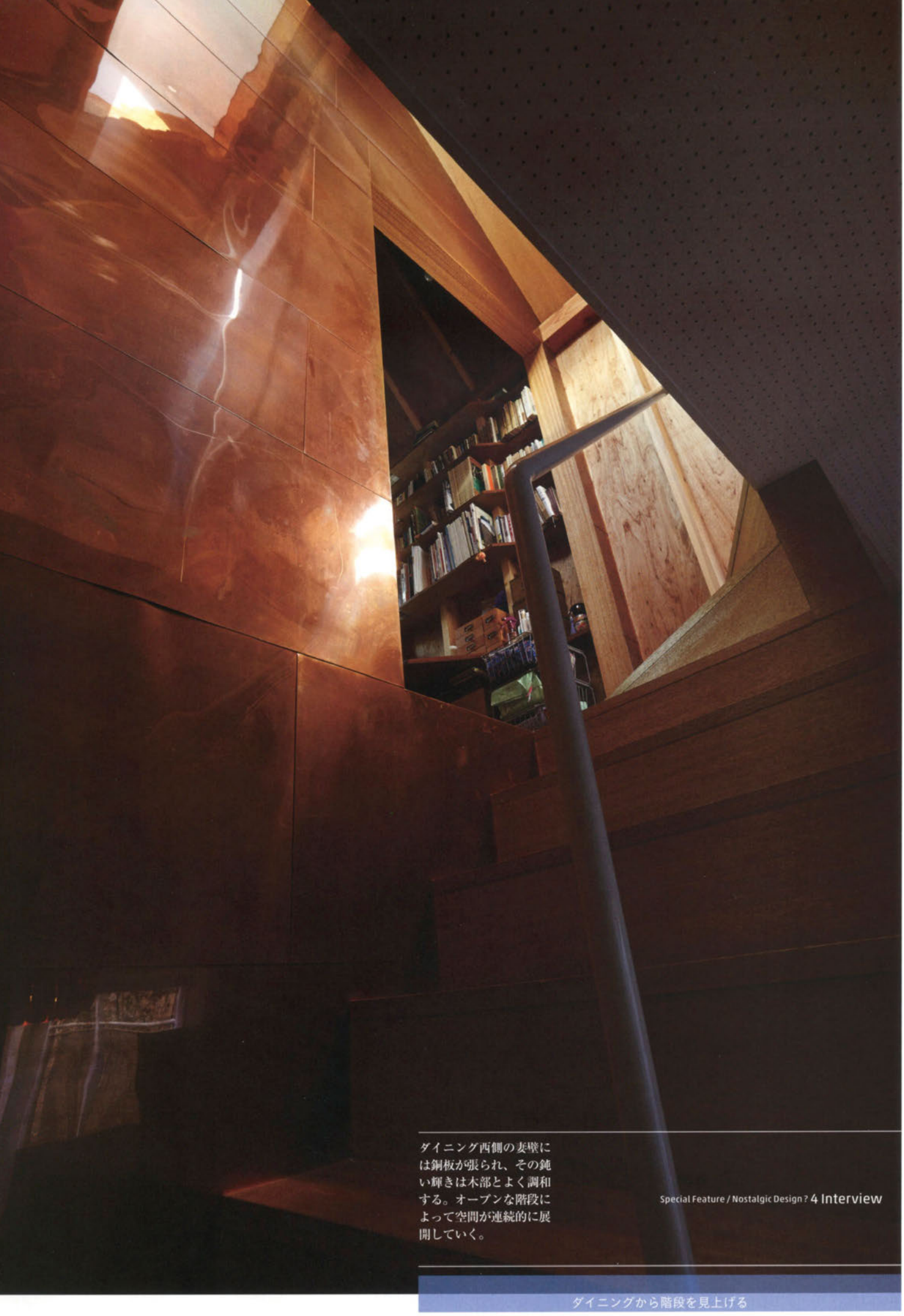
―― 外観がレンガ風に見えるのは……。

塚本 屋根のシングル葺きを、そのまま張り上げているんです。

―― あれを許容しているところがおもしろいなあと（笑）。

塚本 ストライクゾーンが広い（笑）。実践的なものが好きです。実践的であって、その結果が美しくなるような……。要するに、「見た目が美しい」より、「存在が美しい」であってほしい。建築にもそれはあって、古民家は存在が美しいわけです。農村の風景も、見た目としても愛でるようになったのは最近のことで、存在として美しかったからみんながそれを続けてこられたのだと思う。

それと私は、クリシェ、つまり紋切り型に興味がある。それは世の中にいっぱいあって、かつ、みんなの意味のシステムのなかで、ある定まった関係性をほかのものと結んでいる。だからそれをちょっと変えると、まわ



ダイニング西側の妻壁には銅板が張られ、その鈍い輝きは木部とよく調和する。オープンな階段によって空間が連続的に展開していく。

ダイニングから階段を見上げる

りまでグッと変えてしまうパワーがある。

―― クリシェといえば、「ハウス・タワー」(2006)のファサードにアーチ型の窓がありましたね。ああいう窓は、とても俗な住宅に使うものと思っていたので驚きました。

塚本 あれは最初、四角い窓で検討を始めたんですが、どうも牢獄の監視塔のように悲しく見えてしまう。それで、屋上のパラペットを下向きのアーチにえぐって、中世の廃墟感を出しました。

まちをつくるための道筋を示す

―― ファサードの開口について、つねに強く意識されているように感じます。

塚本 今ファサードと窓に一番こだわっているのはアトリエ・ワンだと思います。家のファサードへのこだわりは、坂本一成先生を引き継いでいるつもりです。

―― 1960年代、70年代は、「建築は内側だ」という意識が強すぎたんでしょうね。

塚本 近代に入って建築家という職業が確立していき、その人たちが住宅をつくるようになります。そこでできなかったのは端的にいうと、「まち並みをつくる」ことですよね。まち並みをつくるのに欠かせない共有性についてはお手上げで、結局、個人主義に走って、すごく変なまちをつくってしまった。私たちはそれをなんとかしたい。まちとしてどうつくるかという筋道をきちんと示したい。まわりに建てる人が、「ああやって建てればいいんだ」と思えるようにつくる。道路側の立面は最も意識が集中するところですからね。都市自体は新陳代謝して変わっていくから、動いているものに対する提案というか、「動態介入」のように少しずつ方向づけをすることが求められています。

―― この住宅では、2層にわたってつくられたファサードの開口も印象的です。

塚本 小さい建物だから、凛とした立ち方をしていないと建築にならないというか……。小さい犬が、シャキッとして、ワンワン吠えているのってすごくいいでしょ(笑)。これ、言葉ひとつだと思うんですよ。「町家」という言葉が共有されたら、それだけでずいぶん変わる。町家としてつくるか、狭小住宅としてつくるかは、紙一重なんです。コストも法規も変わらないし、なんら新しい困難が生まれるわけではない。でも、町家という言葉があるだけで歴史的な建築と都市の関係が再生産される。

70年代の都市住宅は、建築家が都市に対して武装している状態で、それが建築家としての矜持だったわけです。だけど私たちは、それを解除したほうがいいという仮説を立ててやってきたんですね。

スタイルでものを見ない時代

―― ここまで建築家としての塚本さんにお話を聞きましたが、教育者としての塚本さんは、今の若い人たちの、ノスタルジックなものを含むデザインの傾向をどうご覧になっていますか。

塚本 私が80年代に受けた建築教育は、もちろんまだ近代主義的なものです。ポストモダニズムの表現が出てきても、学校のカリキュラムはモダンな計画原理。私は今設計製図を教えていますが、当時の建築教育からは相当、逸脱しているかもしれない。私が学生に言っているのは、「建築の文法をきちんと理解して、そこに込められた知性を理解すれば、古いも新しいもない」ということです。「それはすべて利用可能なものとして開かれているのだから、それを使うほうがいい。かつ、どれを使うかにより、歴史的な時間軸のなかに今を位置付けられる」と説明します。そうすると、学生はすごく素直に古民家みたいなものを設計したりする。

たとえば、2年生の最初に出した住宅課題では、北海道にあるようなマンサードの納屋風の建物を出してきた女子学生がいました。彼女が考えたプログラムは、まちのなかで、ヤギを飼いながら住むというものでした(笑)。そこで、「そういう場所では納屋の形式が使われてきた」と言うと、素直にそれで設計を始めるんですよ。結果的におもしろいものができて、ちょっと驚きましたね。すごく柔軟だな、と。私なんか自分で考えて学んで、20年くらいかけてようやくできたことが、軽くできてしまう。スタイルに対するこだわりが全然ないし、スタイルでものを見なくてもいい時代が来たんじゃないかな。

建築のおもしろく、かつ難しいところは、新しいものと古いものを比べたときに、新しいものが必ずしもいいわけではないことです。コンピュータだったら、絶対に新しいものがいい。だけど建築の場合、今の建築とルネサンスの建築とどちらがいいかと聞かれたら、答えに窮しますよね。それがいいところだと思うんです。

アトリエ・ワン

貝島桃代

1969年東京都生まれ。91年日本女子大学家政学部住居学科卒業。92年塚本由晴とアトリエ・ワン設立。94年東京工業大学大学院修士課程修了。96〜97年スイス連邦工科大学奨学生。2000年東京工業大学大学院博士課程満期退学。03年ハーバード大学大学院客員教授。05〜07年スイス連邦工科大学客員教授。09年より筑波大学大学院准教授。11〜12年デンマーク王立アカデミー客員教授。

Kaijima Momoyo

おもな作品／「ガエ・ハウス」(03)、「ハウス&アトリエ・ワン」(06)、「みやしたこうえん」(11)、「BMW Guggenheim Lab」(11)、「Rue Rebiere」(12)、「イズ・ブックカフェ」(12)など。おもな著書／『ペット・アーキテクチャー・ガイドブック』(ワールド・フォト・プレス)、『メイド・イン・トーキョー』(鹿島出版会)、『図解アトリエ・ワン』(TOTO出版)、『Behavior-ology』(Rizzoli)、『House Genealogy Atelier Bow-Wow: All42 Houses』(JA85、新建築社)など。

「スプリットまちや」

ダイニングから
中庭越しに
東棟を見る。

建築概要

所在地	東京都新宿区
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+α
設計	塚本由晴+貝島桃代
	／アトリエ・ワン
構造設計	間藤構造設計事務所
施工	飯塚建築
敷地面積	64.62㎡
建築面積	27.31㎡
延床面積	54.62㎡
階数	地下1階、地上2階
構造	鉄筋コンクリート造+木造在来工法
設計期間	2009年5月～12月
施工期間	2010年2月～7月

おもな外部仕上げ

屋根	アスファルトルーフィング
	シングル葺き
外壁	窯業系サイディング
	アクリル系樹脂吹付け
開口部	木製サッシ
中庭	シラキ ソヨゴ ナンテン
	ツタ類 ハーブ類など
デッキ	バークチップ敷き
雨樋	銅

おもな内部仕上げ

［東棟］

玄関

床	モルタル金ごて防塵塗装
壁・天井	コンクリート打放し

洗面室

床	モルタル金ごて防塵塗装
壁	PBt=9.5㎜ AEP
	一部スイス漆喰仕上げ
天井	PBt=12.5㎜ AEP

浴室・トイレ

床・壁	FRP防水トップコート仕上げ
天井	フレキシブルボード 弾性塗装

寝室1

床	ラワン合板ワックス仕上げ
壁・天井	構造材現しワックス仕上げ
壁	一部スイス漆喰仕上げ

［西棟］

ダイニング

床	モルタル金ごて防塵塗装
壁	ラワン合板ワックス仕上げ
	壁一部スイス漆喰仕上げ
	銅板葺き
天井	シナ有孔板 AEP

キッチン

床	モルタル金ごて防塵塗装
壁・天井	PBt=9.5㎜ AEP

トイレ

床	モルタル金ごて防塵塗装
壁・天井	ラワン合板ワックス仕上げ

寝室2

床	ニードルパンチカーペット
壁・天井	構造材現しワックス仕上げ
	壁一部スイス漆喰仕上げ 銅板葺き

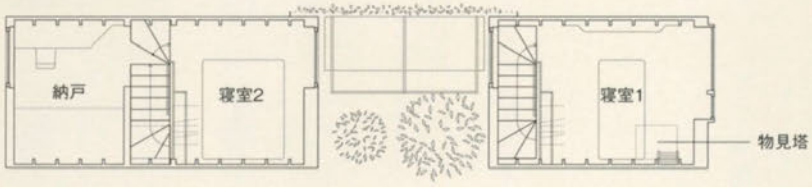
納戸

床	ラワン合板ワックス仕上げ
壁・天井	構造材現しワックス仕上げ
	壁一部スイス漆喰仕上げ

2階平面図

0 1 2m
1/150

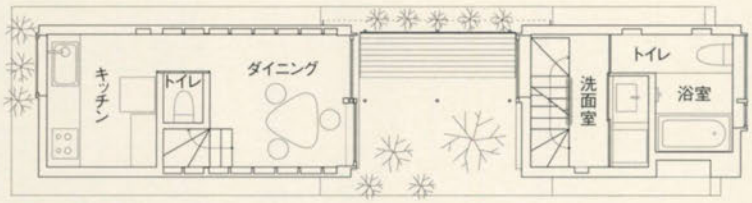
2F



1階平面図

0 1 2m
1/150

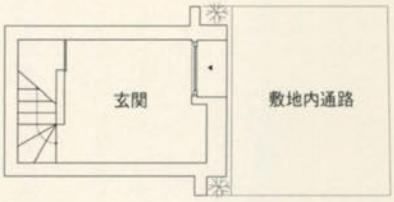
1F



地階平面図

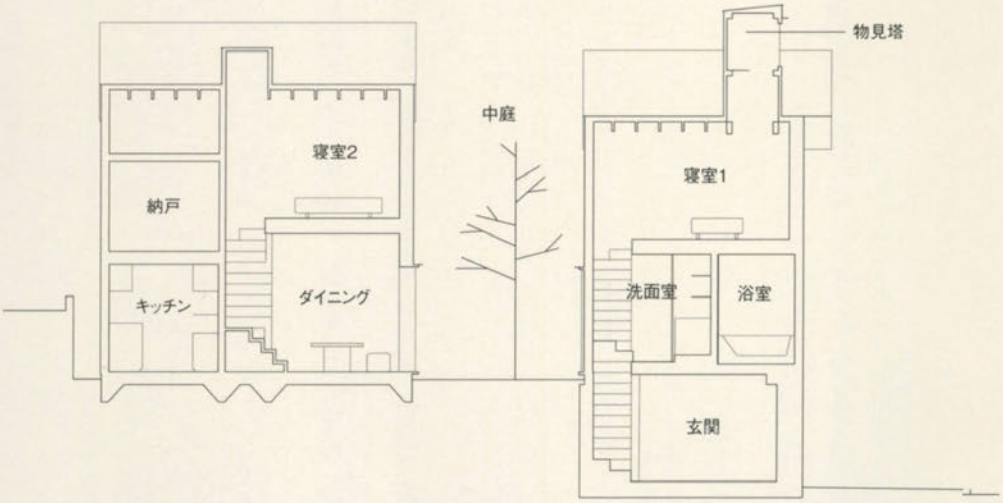
0 1 2m
1/150

B1F



断面図

0 1 2m
1/150



屋根裏部屋で小公女気分

こんな部屋に泊まった。

チェコ共和国は首都プラハの真ん中、ヴルタヴァ（モルダウ）川に重厚な古い橋がかかっている。カレルは、カール、シャルル、チャールズなどと同じこととはいえ、あの橋は英語読みにチャールズ橋というと感じが出ない。やはり「カレル橋」である。

その橋のたもと、左岸のカンパ島にあるホテル。改装と聞いてチェック・イン。赤瓦、濃い黄色に塗った外壁、質素でコンパクトな4階建てのとてもリーズナブルな価格のエコノミーホテル。その最上階の屋根裏部屋は小屋裏があらわし。屋根を支える登り梁に、したたかに頭を打った。そして恐ろしく長い平面。9300㎜もあり、一番奥にベッドがある。ドーマー（＊1）がふたつあるだけ。なんとなく寂しく、長逗留ではないのだがちょっとした小公女（＊2）気分を味わえる。バスルームにはバスタブがなくて市販のシャワーユニットが置いてあるだけ。

ホテルの前は小さな広場になっていてカレル橋から直接階段で降りられる。カレル橋というのはたいへん立派で長さは515mあり、幅は9・5m。45年もかかって建設された。橋というようなものではなく、川にこそかかっているが大きな道。塔が3つもある。両側にはたくさんの大きな彫刻。もちろん石造で、騎馬が城に向かって疾駆していたことがよくわかる。蹄の音も聞こえそう。カレル橋を手前にして夜のプラハ城を望むと絵葉書のようだが、なかなかのものだ。

川には観光用ボートが着く桟橋があり、客用のレストランもある。裏側には水車なども残っていて、対岸の旧市街は新しい開発が許されないが、ここは改装で観光拠点にしようという意図があるのだろうとみた。

プラハ城や大聖堂、市内全域を見下ろすことができる修道院にも徒歩で行くことができる。もちろんカレル橋をわたって旧市街の重厚な広場も近い。いい立地だ。

壮大な建築や立派な広場、映画「アマデウス（＊3）」もこの地で撮ったというところなどを見て歩くと確かにおなかがいっぱいになるのだが、たくさんある土産物屋の品揃えはちょっと首をかしげざるをえない。ガーネット（ざくろ石）や琥珀（＊4）などが並んでいるのはわかるのだが、どうしてこんなにマトリョーシカ（＊5）がいっぱいあるのか。

それから「キュビズム建築（＊6）」といわれるものがいくつか市内にあって、これをどうとらえてよいか私にはわからない。とてもヘンなものだ。キュビズムとして絵画で立体に挑戦したのはわかるが、建築という立体ではどうもヘンなのだ……と思う。

ホテルのレストランにピルスナー・ビール（＊7）を飲みに行った。室内はレンガをはつって雰囲気を出してはいるものの、大きな骨付き肉をただゆでただけで味もないという粗野な料理には驚いた。要注意。

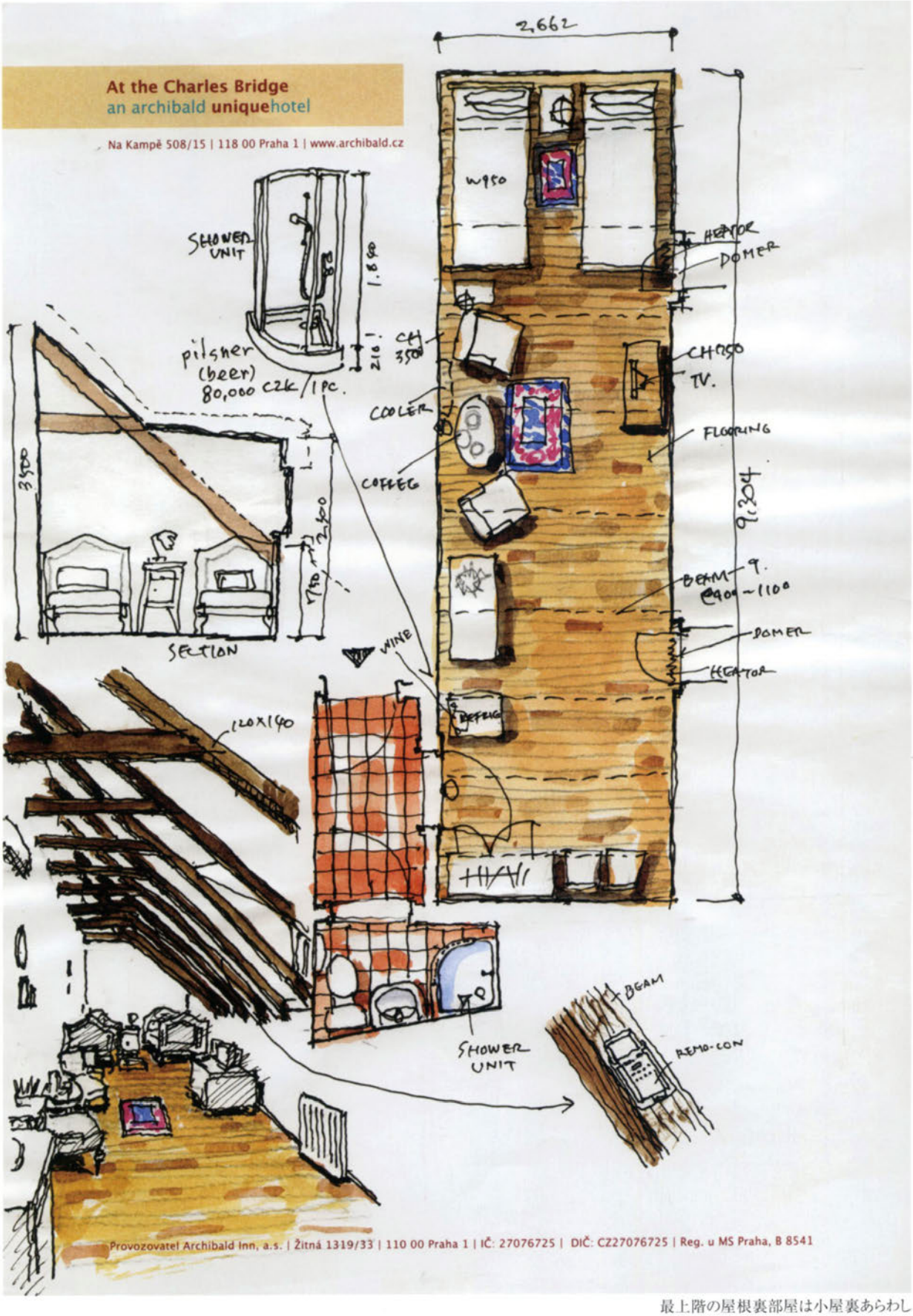
朝のカレル橋

＊1／Dormer：傾斜した屋根に採光・換気のために取り付けられる窓。垂直に付けられることが多い。
＊2／小公女 A Little Princess：アメリカの小説家フランシス・ホジソン・バーネットにより1888年に書かれた児童文学。裕福な家庭に育ったセーラが父の死後、屋根裏で生活する物語。
＊3／アマデウス：1984年制作の米映画。サリエリとモーツアルトの葛藤を描き、アカデミー賞8部門を受賞。
＊4／琥珀 amber：樹脂が長いあいだに固化した宝石、たまに虫が入ったものがある。
＊5／マトリョーシカ：ロシアの人形、6重くらいの「入れ子」になっている。
＊6／キュビズム建築：20世紀初頭のキュビズム芸術を建築で表したといわれる。チェコでしか見られない。作家にヨゼフ・ホルル、ヨゼフ・ゴチャール、パヴェル・ヤナークなど。
＊7／ピルスナー・ビール：硬水の多いヨーロッパにあって、チェコ・ボヘミアの軟水を使った淡い色のビールがピルゼンで醸造された。

キュビズムの
ショップで
求めた陶製小筥

うら・かずや／建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京芸術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99～2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。北海道日建設計デザインアドバイザー。著書に『旅はゲストルーム』（東京書籍・光文社）、『測って描く旅』（彰国社）がある。

Text & Sketch by Ura Kazuya



最上階の屋根裏部屋は小屋裏あらわし

At the Charles Bridge an archibald uniquehotel

Add／Na Kampě 508/15, 110 00 Praha 1
Tel／420 257 531 430
Fax／420 257 533 168
Email／nakampe15@archibald.cz
URL／http://www.archibald.cz
Room Charges／Single 54.99€, Double/Twin 64.99€, Deluxe 94.99～144.99€
1€=122.59円（2013年3月22日現在）

杉丸太の発見

津端邸　基本設計／アントニン・レーモンド　実施設計／津端修一

1／古来、足場と仮小屋にしか使われてこなかった杉丸太で、レーモンドは建築をつくった。木造という土俵で、モダニズムが伝統に勝った一番。

連載 第二十二回

現代住宅併走

1

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu,
Photographs by Akiyama Ryoji

写真／秋山亮二

2

3

2／障子からの採光が、スレンダーな小屋組を浮かび上がらせる。丸太組み小屋の露出は、若き日の吉村順三が、担当した「赤星別邸」（1931）の民家風造りのなかで初めて試みている。吉村先生は「赤星別邸をやったとき、日本の伝統のなかにはモダンにも合う造りがあることを、レーモンドさんに教えました」と述べられている。3／2の見返し。リビングの津端夫妻。

レーモンドの木造は、日本の近代建築史に新しい恵みをもたらした。

大工の伝統技術を巧みに生かしながら、しかも日本の伝統とも欧米とも違うモダンな原理に基づく木造表現である。

この成功を最も端的に、というか最も純粋に、というか最もローコストで実現してみせたのが、戦後9年たって麻布につくられた〝レーモンド事務所〟の建築で、今は取り壊され、残念ながら私は外しか見ていない。

レーモンド事務所の建築が〝端的〟〝純粋〟〝ローコスト〟なのは、残された写真からわかるが、別の証拠もあって、他人がそっくり追実現した例がふたつもある。ひとつは高崎の〝旧井上房一郎邸〟（1952）。井上さんは、戦前、来日したタウトのパトロンを務め、お金にも文化にも恵まれていたのに、レーモンド事務所の小屋のような木造に魅せられ、図面を借りて再現し住んでおられた。

そしてもうひとつが、今回の〝津端邸〟。75年、愛知県は春日井市につくられている。

設計した津端修一さんと夫人の英子さんは、『あしたも、こはるびより。』（主婦と生活社）などの本を出し、定年後の人生の達人夫妻として今では知られている。

私が初めて津端さんに連絡をとったのは、その昔、草創期の日本住宅公団を調べていたときで、住

4

4／住まいを包む雑木林。津端さんは、自宅の敷地だけでなく、高蔵寺周辺の戦時中に荒れた山を雑木林に戻す指導もしている。

5

5／家と雑木林の境で、燻製づくりなど食と農にかかわる作業をする。津端夫妻は今では〝キッチンガーデン〟や〝農のある暮らし〟の達人として名高く、津端修一の住宅公団時代の大活躍を知る人は少ない。

現代住宅併走

Tsubata Shuichi × Fujimori Terunobu

棟の味気ない並列配置を否定し、変化に富んだランダム配置の発明者として知られていた。でも会うことはなく、今回が初訪問。

公団に入ってからのことは承知しているから、それ以前のことを聞いた。

建築を目指したのではなく、飛行機をつくりたくて、今の首都大学東京の前身の都立工業専門学校を出て、1941年に海軍の技術士官となり、厚木で機体をつくっていたが、敗戦。マッカーサーの厚木上陸というか厚木降臨のため、ガソリン補給の用意をしたのが飛行機技術者としての最後で、敗戦を境に建築へと方向転換する。

51年に東大を出、前川國男の紹介でレーモンドの事務所に入り、楽しかったが3年で辞め、坂倉建築研究所に移り、渋谷の東急デパートなどを担当し、これも楽しかったが、プライベートアーキテクトになるには限界を覚え、55年、公団に移った。

公団で活躍する津端さんが現在地に自邸をつくることになったのはかの〝高蔵寺ニュータウン〟建設のためだった。

津端さんは役人気質が幅を利かす公団のなかで〝夢多き人〟〝やりたいことは委細構わずやる人〟として鳴らす。公団の外でも、海軍時代からのヨットマンとして知られ、本格的なヨットを設計し、自分でつくり、太平洋をひとりで縦横に走ってきた。88歳になったが、

6／玄関はなく、庭から直接上がる。庭先は雑木林となっていて、面積は広くないが、雑木林の心地よさを十分保持している。

6

今年もタヒチまで波を切りに行った。夫人の本を読むと、そうした自由で活動的な夫と暮らすため、質屋通いもしばしばだったという。

建築家・津端修一は、ススキしか生えないような高蔵寺の原野の一画を相手に、ふたつのことをした。ひとつは、雑木林の回復。エゴ、ソロ、ナラ、クヌギ、アベマキの6種の苗木を坪当たり6本で計180本植えた。これらの一部が現在、立派な雑木林に成長し、津端邸の庭と畑と家を守っている。

もうひとつは、78年にドイツで見たキッチンガーデンの実践。いろんなメディアの津端家訪問記のページを開くと、雑木林とキッチンガーデンの話が出てくるからそれを見てほしい。

私が来たのは住宅のため。どうしてレーモンドの編み出した木造をほとんど写すようにして自分の家としたのか。

「麻布笄町のレーモンド事務所で3年間過ごしました。以後26年間、思いつめて、ついに同じものを手に入れることができました。これだけいい空間が、足場用の杉丸太と合板で生まれるんですよ。この家は、合板を南洋材に替えてますが」

レーモンドは建築家冥利に尽きるだろう。目のない素人が見たらただの山小屋と見まごうような安普請が、建築のわかる人をここまで引きつけるのだ。デザインの勝利。井上さんも同じ思いだったにちがいない。

これのどこがそれほどいい効果を生んでいるのか、あらためて考えてみた。

まず、構造材のスレンダーさがある。日本の伝統木造の視覚上の欠点は、柱材に比べ梁などの小屋組が太くなり、頭でっかちになることだが、レーモンドはトラスを巧みに組み合わせ、下のほうが太く、上のほうが細い合理的な材の使い方を実現した。重い小屋組がのしかかるのではなく、軽々と自分を包んでくれるような小屋組なのである。

モダニズム建築の肝所である〝構造と材料を隠すのではなく、積極的に表現する〟という構造表現主義を、これだけ〝端的〟〝純粋〟〝ローコスト〟で実現した例はレーモンドのほかにはない。

それが可能になったのは足場用杉丸太の力が大きい。もし杉丸太という、強い割には軽くてまっすぐで安い材が日本で発達していなかったら不可能だった。杉丸太は奈良の大仏殿をすっぽり覆うほどの構造力を秘めているのだ。木のジュラルミン。

杉丸太の肌も利いている。なんせ数寄屋の磨丸太と同じ肌。

そして何より利いているのは、多用されている半割材ではないか。角材をふたつの半割材で両側から掌で押さえるように接合する合理性は、見事というしかないし、また、丸太の断面の円形ゆえの無方向性が、半割りによって縦へと変わり、梁材同様の縦の方向性を得て、構造の美しさがそのぶん強化される。レーモンドの木造小屋組の秘訣は底が深いのである。

問いは続く。レーモンドは、この半割丸太で挟むつくり方をどこで学んだんだろう。杉丸太は日本にちがいないが、日本の伝統木造にも杉丸太の足場にも挟む造りはない。

レーモンドの日本以外の木造体験は、まず生まれ育ったチェコとスロバキア、次にアメリカとなる。レーモンドを調べるため4回チェコ・スロバキアを訪れているが、残念ながらこの問題意識なしで訪れ、有無を確認していない。アメリカのツーバイフォーのトラス小屋組はツーバイフォー材で大いに挟む。でも丸太は使わない。

アメリカのツーバイフォーの挟むつくり方を、日本の杉丸太でやったと解釈すれば、あれこれ腑には落ちる。

現代住宅併走

Tsubata Shuichi × Fujimori Terunobu

8　7

7／アトリエで機を織る英子さん。8／菜園の片隅には作業小屋があり、農産物の保存と加工に使われている。レーモンドの杉丸太小屋は、こうした作業空間と相性がいい。作業空間に建築の真実を認めるレーモンドの感性はどこに由来するんだろう。チェコかアメリカか日本か。

The
House
of
Tsubata

11

津端邸

建築概要	
所在地	愛知県春日井市
主要用途	専用住宅
基本設計	アントニン・レーモンド
実施設計	津端修一
施工	平野工務店
敷地面積	1,000㎡
建築面積	130㎡(ピロティを含む)
延床面積	165㎡
階数	地上1階
構造	木造
竣工	1975年(アトリエ・1980年)
図面提供	津端修一

津端修一

Tsubata Shuichi

1925年、愛知県に生まれる。戦時中のことゆえ、飛行機技術者を目指すが、敗戦により建築に転じ、51年、東京大学卒業後、レーモンド設計事務所、坂倉建築研究所を経て、55年、草創期の日本住宅公団に入った。ハワイの叔父より送られるアメリカの雑誌によって最新の住宅建築事情にくわしく、その知識を生かして活躍し、その後、61年からは高蔵寺ニュータウンづくりに腕を振るう。そのまま高蔵寺に居つき、キッチンガーデンのある郊外暮らしの実践者として英子夫人ともども知られている。

藤森照信

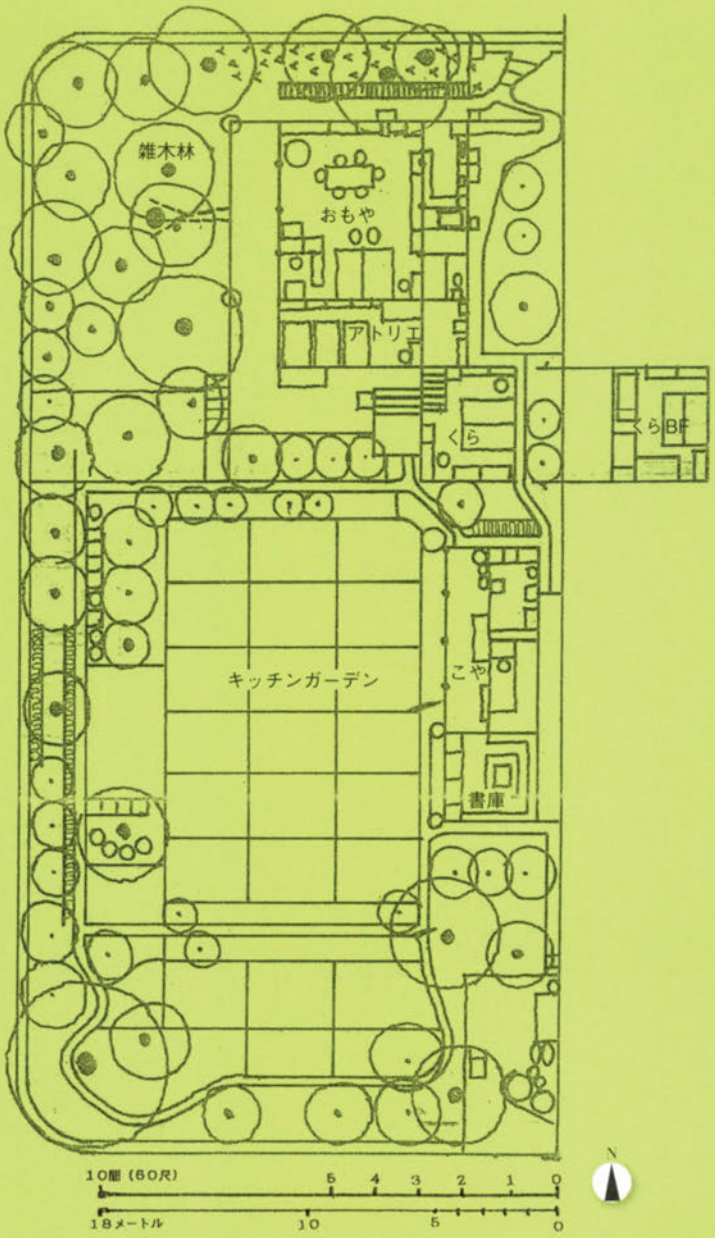
Fujimori Terunobu

建築史家。工学院大学教授。東京大学名誉教授。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞=『明治の東京計画』(岩波書店)で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険 東京篇』(筑摩書房)で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸(ニラ・ハウス)」(1997)で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)で日本建築学会作品賞など。

平面配置図

0 2 4m

1/300



9／建築の取材に来たが、つい目が行ってしまう。10／「シュウイチさん」と「ヒデコさん」と一緒に。上図は住まいと雑木林と菜園と作業小屋の現在の配置。11／北側から見た雑木林とおもや。

10 9

東京ステーションホテル

百年の歴史に新しい価値を加えたホテル

取材・文／大山直美
写真／川辺明伸
（客室＋茶谷さんポートレート）

1914年に開業した辰野金吾設計の東京駅丸の内駅舎は、東京大空襲により、ドーム屋根や内装などの主要な部分が焼失。戦後まもなく規模を縮小して修復されていたが、2007年から創建時の姿に復原するための工事が始まり、昨年10月、全面再開業の運びとなった。これに伴い、駅舎竣工の翌年に開業した東京ステーションホテルも全面改装を終え、グランドオープンした。プロジェクト全体の設計・監理はジェイアール東日本建築設計事務所が手がけている。

空気感を大切にしたインテリアデザイン

以前のホテルは駅舎の南半分の1、2階（一部3階）にあったが、改装後は2階建てから3階建てになった建物のうち、1階の南部分と2、3階の大部分、さらに創建当時の屋根裏空間の一部もホテルとして活用されたため、延床面積は以前の約4倍、客室数も58室から150室に増えている。

ロビーに一歩入ると、外観のイメージを裏切らないヨーロピアン・クラシックのインテリアが広がるが、東京ステーションホテルの茶谷譲介さんによれば、当初は内部をモダンデザインにしたらどうかという意見もあったそうだ。確かに、ヨーロッパでは歴史的建造物の内部にモダンなホテル空間が潜む例も珍しくないが、はたして赤煉瓦の古い建物自体が珍しい日本で、あえて外と中を対比させ意表を突く必要があるのか。検討を重ねる一方、顧客対象のアンケート調査を実施したところ、外観になじむクラシックな内装を期待する声が多数を占めた。この結果もあり、最終的にクラシック様式に落ち

→東京駅コンコース

↑バスルーム方向を見る

写真右上／ドームサイド客室の窓から見た、東京駅南ドームコンコース。駅舎内のホテルであることを実感する風景。右中／天井高4mと、客室のなかで最も高い。下4点／外観など、客室以外の写真。（写真提供／東京ステーションホテル）

↓皇居側（西側）から見た東京駅丸の内駅舎全景

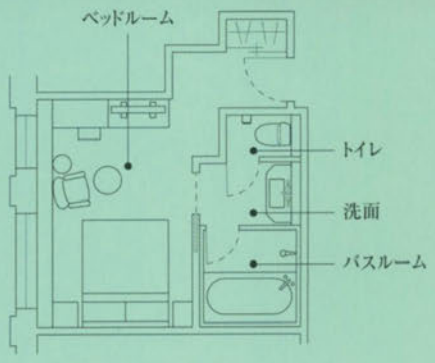
ドームサイド

↑ドーム方向を見る

↓洗面・バスルーム

↓トイレ

写真上／ドームサイド客室は、南北のドームまわりに28室。クラシックな内装と、窓越しに見えるドームのレリーフが調和する。下右／トイレ。下左／バスルームは洗い場付きが標準。



1/150

0 1 2m

↓4階アトリウム

↓客室廊下

↓1階エントランスロビー

↑リビングルーム

↑トイレ

写真右／メゾネット客室の下階（3階）洗面。クラシカルなデザインは水まわりにも生かされている。右手にトイレ、左手にバスルーム。上／トイレ。左上／下階のリビングルーム。P55右／上階のベッドルーム。中／吹抜け見下ろし。

↑バスルーム

↑バスタブの窪み

写真上／バスタブ手前上縁の窪みは、あふれたお湯の通り道。たっぷりお湯を張って、肩まで浸かってくつろげるよう、オーバーフロー穴は付けられていない。左／バスルームには、大きめの角型オーバーヘッドレインシャワーを標準装備。

↑洗面

着いたという。

インテリアの基本デザインを手がけたのは海外事務所5社によるコンペで選ばれたロンドンの設計事務所、リッチモンド・インターナショナル。「英国の事務所に依頼したのは、新しくつくるヨーロピアン・クラシックの空間に本物らしさを出すには、やはり本物を知る人たちでないと難しいだろうと考えたからです。日本人がまがいものの和風インテリアを見ると、障子の組子の縦横のバランスを見ただけでも違和感を感じるように、染みついた感覚があるはずですから」と茶谷さんは言う。

彼らによる内装の基本デザインは、実施設計を手がけたジェイアール東日本建築設計事務所と、設計協力をした日本設計によって、細部に至るまで忠実に具現化されている。設計を担当した中村智さん（ジェイアール東日本建築設計事務所・元所員、現在、日本設計）はこう語る。

「個々のデザインや仕上げに限らず、全体を優雅で洗練されたリッチモンドらしいスタイルで調和させ、エントランス、ロビー、エレベータホール、廊下、そして客室へと進んできたときの空気感を大切にしたつもりです」

保存・復原のなかで水まわりを豊かにする工夫

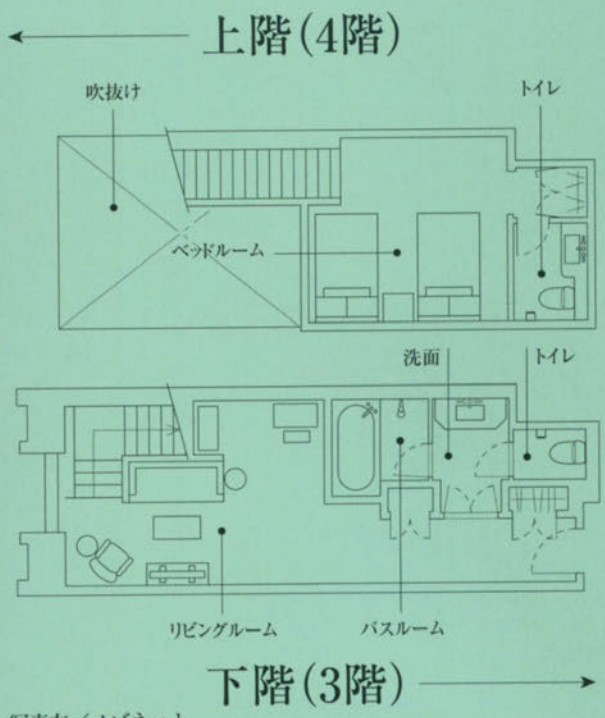
全長335mという長大な駅舎の2、3階にある客室フロアは、大きく南北ふたつのドーム部と、両者を

メゾネット

↑ベッドルーム脇のトイレ

↑階段吹抜け

↑ベッドルーム



写真左／メゾネットは、上階（4階）のベッドルーム脇にもトイレを設置。就寝を妨げないように、静音タイプの便器を採用している。

つなぐ切妻部に分かれ、ドーム部には駅コンコースの吹抜けを囲むように放射状に客室を配置。一方の切妻部は長い廊下を挟んで、皇居側と線路側の両サイドにずらりと客室が並んでいる。さらに、ホテルでは珍しいメゾネットタイプも7室ある。

中村さんいわく「動線が長いデメリットをプラスに転じるべく、節で切って空間のリズムをつくった」という切妻部の廊下の見通しは、なんとも壮観。まるで合わせ鏡をのぞいているようだ。廊下沿いには東京駅にまつわるさまざまなアートや資料がギャラリーのように展示されており、眺めながら歩くと長い距離もさほど気にならない。じつはこの廊下、もとは幅4mだったのを半分の約2mに狭めたものだという。「建物を生かす以上、スパンは変えられませんが、部屋は広くしたい。そこで、廊下を半分にし、その分を皇居側の部屋に繰り入れて、標準的な部屋の床面積を30㎡から40㎡に増やし、その10㎡分をすべて水まわりの充実にあてました」と茶谷さん。

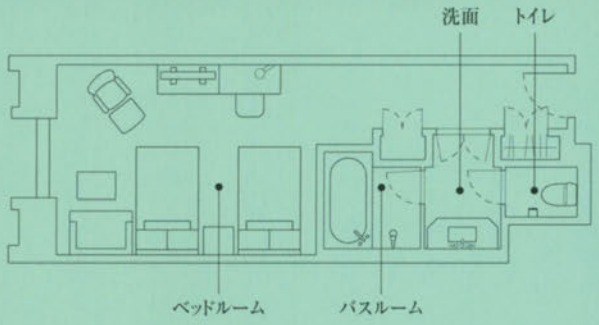
日本人観光客が多く、シニア層も少なくないことから、バスルームは洗い場付きが基本。たっぷりお湯を張って肩まで浸かってくつろげるよう、バスタブにはオーバーフロー穴をなくした。バスタブ側面上縁の中ほどには窪みが設けてあるが、中村さんによれば、これはお湯があふれた際の通り道であり、高さも数cm低く抑え、出入りしやすいように配慮したものだそうだ。

水栓金物などの表示サインも、シ

パレスサイド

↑窓方向を見る

写真上と下右／全長335mの駅舎の丸の内側（西側）に位置するパレスサイド客室。計81室と最も客室数が多い。下中／窓から見る行幸通り。奥に皇居外苑の緑を望む。下左／トイレ。バスルームの仕様はドームサイドやメゾネットの客室と同じ。ただ、既存躯体を尊重したため、ユニットバスの形状・寸法のバリエーションは非常に多くなり、それを集約する作業が大変だったという。

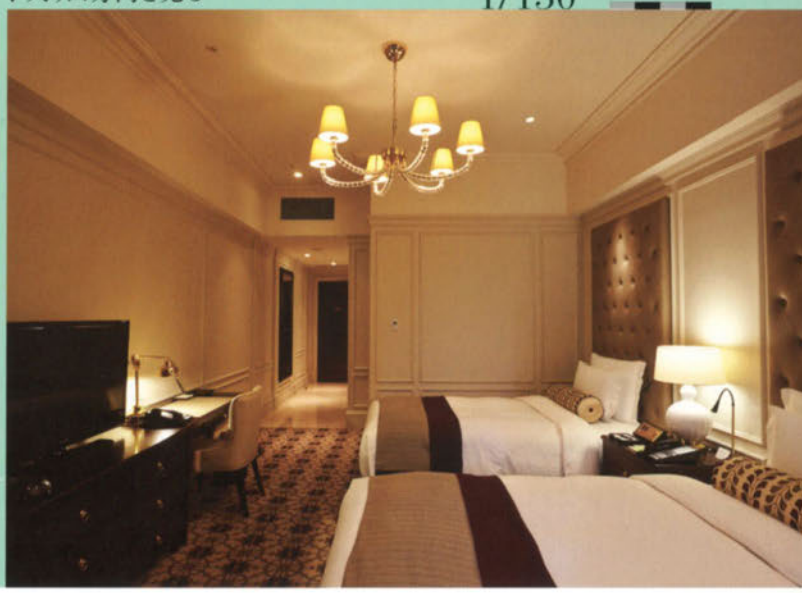


1/150 0 1 2m

↓トイレ

↓窓からの眺め

↓入り口方向を見る



東京ステーションホテル

THE TOKYO STATION HOTEL

建築概要

所在地	東京都千代田区丸の内1-9-1
主要用途	ホテル
事業主	東日本旅客鉄道
ホテル運営	日本ホテル
プロジェクト統括	東日本旅客鉄道
設計・監理	ジェイアール東日本建築設計事務所
ホテルインテリア基本デザイン	リッチモンド・インターナショナル
ホテルインテリア設計協力	日本設計
施工	東京駅丸の内駅舎 保存・復原工事共同企業体
敷地面積	20,482.04㎡
建築面積	9,683.04㎡
延床面積	ホテル専有面積：22,400㎡、 全体：42,971.53㎡
構造	鉄骨煉瓦造・鉄筋コンクリート造 （一部鉄骨造・鉄骨鉄筋コンクリート造）
階数	地下2階、地上3階（一部4階）
設計期間	2004年3月～2006年3月
施工期間	2007年5月～2012年10月
開業	2012年10月3日
客室数	150室 クラシック：29室（23～47㎡） パレスサイド：81室（26～58㎡） ドームサイド：28室（30～44㎡） メゾネット：7室（65㎡） スイート：4室（72～120㎡） ロイヤルスイート：1室（173㎡）

おもなTOTO使用機器

●和風ユニットバス	JBE1919T
浴槽	FBY1710特
シャワー金具	HG27390特（CERA/Hansgrohe） オーバーヘッドシャワー HG34725特（CERA/Hansgrohe） サーモスタット HG28536（CERA/Hansgrohe） シャワーヘッド
浴槽水栓	TBC20特
●大便器	CS806B+TCF4531特（メゾネット） CES987特（パレスサイド、ドームサイド）
●ペーパーホルダー	EC.S0800R（CERA/EMCO）
●スペアペーパーホルダー	EC.S0806R（CERA/EMCO）
●サニタリーフック	EC.S0875（CERA/EMCO）
●洗面器	DV030549-00（CERA/DURAVIT）
●洗面器水栓	ZU2425特（CERA/ZUCCHETTI）

日本ホテル㈱
東京ステーションホテル
総支配人室 課長
茶谷譲介
Chatani Josuke

㈱ジェイアール東日本建築設計事務所（元所員）
現在、㈱日本設計
建築設計群 主管
中村 智
Nakamura Satoshi

↑夜景（写真提供／東京ステーションホテル）

ニア層にもわかりやすいよう、気を配ったと茶谷さんは語る。「とかくわかりにくいのがシャワーの表示で、とくにオーバーヘッドレインシャワー付きの場合、いきなり冷水を浴びかねませんから、デザイン的におかしくない程度にできるだけサインを大きくしてもらいました」。洗面台の水栓金物にも色で視認しやすいよう、赤と青のラインをさりげなく入れたという。

このほか、感心したのが、照明の工夫。通常、夜中にトイレを使用する場合、暗い室内で足元灯だけをたよりにバスルームに入ったとたん、煌々と明るい照明で目が覚めてしまい、歳をとるにつれ、再び寝つくことができなくなるケースも少なくない。それを改善しようと、照明デザイナーにも協力を仰ぎ、〝ナイトモード〟ともいえる機能を設けている。室内の灯りを全消灯か足元灯だけにした状態（一般的な就寝状態）でバスルームの照明を点灯すると、通常の30％の明るさになるように設定。なおかつ、ベッドからバスルームに至る経路にも足元灯を壁面に埋め込むという念の入れようだ。

重要文化財を現代に生かす先進例として

改札を行き交う人の流れが見下ろせる、天井の高い「ドームサイド」、行幸通りの先に皇居の緑が望める「パレスサイド」、リビングとベッドルームでフロアが分かれた住宅感覚の「メゾネット」と、それぞれに個性をたたえた客室には、「次は違う部屋に泊まってみたい」というリピーター心をくすぐる魅力がある。ドーム部と切妻部ではカラースキームを変えるなど、多彩なデザインも見どころのひとつ。「建物は愛されないと長生きしないので、できれば何度も足を運んでいただきたいですね」と中村さん。茶谷さんによれば、ホテル宿泊自体が主目的で、観光に出かけるよりなるべく長時間ホテル内に滞在したいというお客様が多いため、目下、15時のチェックインタイムには平日でもフロントに行列ができるほどの人気ぶりだそうだ。

おふたりとも、最も大変だったのは、文化財としての煉瓦壁の軀体を極力残すことを優先した結果、客室も、それに伴うユニットバスもバリエーションが非常に多くなってしまい、それを集約する作業だったと振り返るが、外からはそうした苦労は感じられない。新旧が一体になった居心地のよいホテルは、重要文化財の内部を現代施設として活用するという、日本ではまだ稀少な先進例として、今後も注目を集めていくことだろう。

人が集まる「森」の仕掛けから

(株)浜松建設

HAMAMATSU

代表取締役 濵松和夫さん

木漏れ日のなかで話を聞いていると、時折、どこかの別荘にでもいるような、くつろいだ気分になる。長崎県諫早市で浜松建設を率いる濵松和夫さんのインタビューは、そんな雰囲気のなかで行われた。場所は、浜松建設本社も置かれる、通称「風の森」内の「風の森パビリオン」。

「お客さんには、大きな窓が見えるようにそちら側に座ってもらうんですよ。そうすると、外がよく見えるでしょう」

「森」にこだわりつづける濵松さんの術中に、まんまとはまっていたようだ。

普賢岳噴火で材木業から建設業へ

濵松さんが諫早で浜松建設を立ち上げたのは1993年。島原半島南部の深江町（現南島原市）にあった「まるは木材」から独立する形でのスタートだった。だが、決して準備万端の希望に満ちた船出ではなかった。

「材木業自体は売り上げも伸びていました。ところが普賢岳の噴火でそれがパタッと売れなくなってしまった。いい材料があるのに売れない。だから、材木を供給するだけではなく、使う側もやろう、と家づくりを始めたんです」

濵松さんは、地元の学校を卒業後、東京のゼネコンで3年ほど修業をして帰郷。家業だったまるは木材入りした後は、持ち前のバイタリティで売り上げを数倍に伸ばしていた。そこを襲ったのが雲仙普賢岳の噴火（90年～）である。噴火は、多くの人の運命を左右したが、濵松さんも例外ではなかったのだ。

材木業から建設業への転身は、今までの顧客を敵にまわすことでもある。濵松さんも、親しくしていたお客さんから「おまえのところは潰す」と言われたこともあったそうだ。しかし、そんな逆風のなかでも、浜松建設は少しずつ力を蓄えていった。

山にモデルハウスを建てる発想と戦略

濵松さんの第2の転機は、社

地域に生きる会社 Volume 59

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、
それぞれの土地柄、会社の性格、
そして会社をリードする人物の性格、
マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

HAMAMATSU Hamamatsu Kazuo

濱松和夫（はままつ・かずお）／1966年長崎県生まれ。84年長崎県立島原工業高校卒業。東京のゼネコンに3年勤めた後、家業の「まるは木材」を継ぐ。93年浜松建設設立。2002年本社移転とともに「風の森」開発。現在、地元テレビ局・NCC長崎文化放送の情報番組「はなきん」でコーナーをもち、月1回出演している。

屋が道路拡幅による立ち退き要請を受けたことに始まる。新社屋をどこに置くか。ここで濱松さんは、一般的な答えとは真逆の選択をする。人が集まる市街地ではなく、みかん畑だった山を丸ごと購入。濱松さん自らユンボを駆って「風の森」を切りひらき、ここに社屋とモデルハウス、さらにカフェと雑貨店を開いたのである。

もともとの興味は「森」だった。柳生博氏（俳優、作庭家、日本野鳥の会会長）の八ヶ岳の雑木林を訪ねたとき、「森ってこんなに気持ちがいいのか」と魅せられた。

「長崎は常緑の木が多くて、四季を感じる、いわゆる『雑木林』は少ない。だからでしょうか、柳生さんの森ではずっとここにいたいと思うような気持ちよさを感じたんです」

そこで「森」をつくった。人を呼ぶカフェも仕掛けた。濱松さんの思惑は当たり、多くのメディアが注目。「おしゃれスポット」風の森は繰り返し紹介され、人々が押し寄せた。やがて、ここで店を開きたいという人まで現れて、飲食店や輸入雑貨店など、店舗も増えた。濱松さんは、持ち前の人なつっこいキャラクターを生かして、現在でもテレビ、ラジオにレギュラーで出演し、ライフスタイルの提案を続ける。それは「浜松建設社長」ではなく、「風の森の案内人」として存在が定着しているからこそできることだ。今、毎年開催する「風の森マーケット」は、2日間で4000人を集める大イベントになっている。

そんな追い風のなかで浜松建設は、年間およそ50棟を手がける地域ビルダーに成長した。大きな特徴が、庭と一体になった家づくり。濱松さんが感動した森の心地よさを、一軒一軒で再現したいという思いがこもる。

「お客さんがしゃべったことをその場でパースにして見せるとか、とにかく相手を喜ばせたい、驚かせたい、という気持ちをスタッフの『標準』にしたい」と語る濱松さんは、一方で「社内情報を全員が共有し、以前のお客さんから、不満がないか、困っていることはないかをしっかりと聞いていきたい」と堅実な経営者としての顔も併せもつ。ときに大胆に、しかし堅実に、そして繊細に。その活動は、かつてのみかん畑に根を張って枝を広げ、大きな森へと育っているごとくである。

写真上右／「風の森」にある新しいモデルハウス「山鳥の家」の1階LDK。外には大きな木製デッキが広がる。上左／「山鳥の家」の外観。

写真右ページ上／濱松和夫さん。「風の森」の一角にある「風の森パビリオン」にて。ここは、お客さんの話を聞きながら一緒に家のイメージをふくらませる空間だという。外に見えるのは本社屋。下右／モデルハウス「唐比（からこ）の家」の室内。外とのつながりを考えた家づくりが基本。下左／「唐比の家」の外観。「風の森」の傾斜を生かしたスキップフロアとなっている。

Data

緑あふれる夏季の「風の森パビリオン」（写真上）と、「唐比の家」（下）。四季を感じる森が育っている（写真提供／浜松建設）。

㈱浜松建設
本社所在地
長崎県諫早市
森山町唐比北341-1
電話
0957(36)2203
代表取締役
濱松和夫
会社設立
1993年
従業員数
30人
事業内容
一般建築
（注文住宅、各種増改築工事）
木材・一般新建材・
住宅設備機器販売・
ガーデニング工事・
フラワーショップ・
飲食店・雑貨店
売上高
15億円（2012年4月期）
関連会社
・資材事業部
㈱ハママツ（まるは木材）
・ガーデニング事業
㈲風の森カンパニー
フラワーショップ　カロム
・販売促進事業
風の森
風びより
風の森まなびの
URL
www.hamamatsu-kensetsu.co.jp

取材・文／市川幹朗　写真／川辺明伸

会期／2013年4月17日（水）～6月22日（土）

中村好文展「小屋においでよ!」

心地よい住宅の設計で知られる建築家、
中村好文（なかむらよしふみ）氏。
その創作の原点である「小屋」をテーマに、
氏が影響を受けた古今東西の小屋から、
自身が手がけた小屋的な作品までをご紹介します。

写真／雨宮秀也

Koma Hut

2009年

長野県北佐久郡　軽井沢の森の中にある山荘。左手はベンチを設えた食堂。右手の床を掘り下げた炉辺にストーブがある。

Luna Hut

2012年

兵庫県神戸市　床面積2坪のこの眺望小屋は、眼下に阪神平野と大阪湾一帯を見下ろす六甲の山の上に建てられた。

Jin Hut

2012年

北海道虻田郡真狩村　北海道真狩村のパン屋さんのために、パンを焼く薪窯小屋を書斎兼ゲストハウスに改修した建物。

小屋においでよ！

文・作品説明／中村好文

32歳で独立してから30数年間、おもに住宅設計と家具デザインの仕事をしてきました。そのあいだに、レストランやカフェを設計したり、小さな美術館や個人記念館などを手がけたりもしましたが、仕事のほとんどは住宅設計でした。

「ビッグプロジェクトには見向きもせず、住宅ひとすじに……」と言いたいところですが、実際には「ビッグプロジェクトのほうが、ぼくに見向きもしなかった」というのが本当のところです。ただ、このことは私の「望むところ」でした。もともと、建築家としての私の最大の関心事は「人のくらし」と「人のすまい」でしたから、身の丈を越えた大きな仕事を抱えて右往左往することなく、心おきなく住宅の仕事に取り組むことができたのは幸いでした。

ところで、私の「人のくらし」と「人のすまい」への関心は、「住宅ってなんだろう?」を考えることでもありました。ある時期からは住宅の原型が「小屋」にあるような気がしはじめて、南仏のル・コルビュジエの休暇小屋や、ロンドン郊外のバーナード・ショーの小屋や、岩手県花巻の高村光太郎の小屋など、古今東西の小屋を世界各地に訪ね歩く旅を繰り返してきました。そして、8年ほど前からは、エネルギー自給自足を目指す私自身の小屋（「Lemm Hut」2005年、長野県）で、自然の恵みと自分自身に向かい合う質素な小屋暮らしを愉しむようになりました。

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY・MA

次回予告

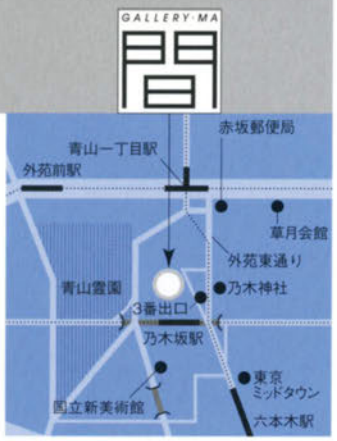
クリスチャン・ケレツ展

スイスの現代建築界を牽引する建築家のひとり、クリスチャン・ケレツ氏の日本で初めての個展を開催します。「ワルシャワ近代美術館コンペ案」などの計画案のほか、中国で計画中の超高層ビルや、ブラジルの低所得者居住区の再開発計画など、現在進行中の最新プロジェクトも紹介予定。

会期	2013年7月19日(金)〜9月28日(土)
講演会	7月19日(金)／津田ホール ※事前申し込み制 詳細は5月中旬、TOTOギャラリー・間ウェブサイトにアップします。

TOTO
ギャラリー・間
↓

所在地	東京都港区 南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル3階
電話	03(3402)1010
ファクス	03(3423)4085
開館時間	11:00〜18:00 (金曜日のみ11:00〜19:00)
休館日	日曜日・月曜日・祝日、および展示替え期間、夏期休館8/10〜19(予定)
入場料	無料
アクセス	●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車7番出口徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車4a番出口徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線、都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車4番出口徒歩7分



www.toto.co.jp/gallerma/

TOTOギャラリー・間で展覧会をします

Yoshifumi Nakamura： Come on-a my Hut！

中村好文（Yoshifumi Nakamura）／1948年千葉県生まれ。72年武蔵野美術大学建築学科卒業。72〜74年宍道建築設計事務所勤務の後、都立品川職業訓練所木工科で家具製作を学ぶ。76〜80年吉村順三設計事務所勤務。81年レミングハウス設立。99年〜日本大学生産工学部建築工学科教授。87年「三谷さんの家」で第1回吉岡賞受賞、93年「一連の住宅作品」で第18回吉田五十八賞「特別賞」受賞。おもな作品に、「三谷さんの家」(長野県、1985年)、「上総の家Ⅰ、Ⅱ」(千葉県、1991年、1992年)、「museum as it is」(千葉県、1994年)、「扇ガ谷の住宅」(神奈川県、1998年)、「Rei Hut」(栃木県、2001年)、「伊丹十三記念館」(愛媛県、2007年)、「明月谷の家」(神奈川県、2007年）など。著書に、『住宅巡礼』、『住宅読本』、『意中の建築上・下巻』(以上新潮社)、『普段着の住宅術』(王国社)、『住宅巡礼・ふたたび』(筑摩書房)、『中村好文　普通の住宅、普通の別荘』(TOTO出版)など。共著に『普請の顛末』(柏木博と共著、岩波書店）などがある。
＊ポートレイト／雨宮秀也

Peak Hut

2012年

長野県北佐久郡

「風景に対して平身低頭するように」低く抑えた山荘。ゆるい勾配の庇が野球帽のつばのように張り出している。

講演会

中村好文 講演会「小屋から家へ」

日時
2013年4月25日(木)
17:30開場、18:30開演、
20:30終演(予定)

会場
建築会館ホール
(東京都港区芝5-26-20)

定員
350人／参加無料

参加方法
ウェブサイトより
事前にお申し込みください。

申し込み期間
2013年3月8日(金)〜4月7日(日)
抽選のうえ、
2013年4月15日(月)までに
結果をご連絡いたします。

「小屋においでよ！」と題した今回の展覧会は、そんな小屋好きの建築家が敬愛をこめて「小屋」に捧げるオマージュです。

会場では、長いあいだ、私の心のなかに住みつづけてきた古今東西の小屋の名作について語るとともに、これまで私の手がけてきた「小屋」と「小屋的な住宅」を紹介します。そして、中庭にはこの展覧会を象徴するひとり暮らしのための「究極の小屋」を展示します。

この展覧会が、来場者のひとりひとりにとって、小屋を通じて「住宅とは何か？」を考えるまたとないきっかけになってくれますように……。

TOTO News

TOTO

TOTOの最新情報

TOTO News 1

TOTO・DAIKEN・YKKAP「グリーンリモデルフェア2013」を開催します

TOTO・DAIKEN・YKKAPのコラボレーションによる大規模イベント「グリーンリモデルフェア2013」を、4月より各地で開催します。
「家がワカると、家がカワる。暮らし、快適、新発見！」をテーマとして、住設機器・内装建材・サッシのトップメーカー3社が総力をあげて、みなさまに新しい生活スタイル、グリーンリモデルを実現するための手段や効果をご提案します。
下記会場にて開催しますので、ぜひお近くの会場に足をお運びいただき、グリーンリモデルをご体感ください。

2010年の名古屋会場での様子。

東京会場		名古屋会場		大阪会場	
開催日時	4月19日(金) 10:00〜17:00	開催日時	5月17日(金) 10:00〜17:00	開催日時	6月21日(金) 10:00〜17:00
	4月20日(土) 10:00〜17:00		5月18日(土) 10:00〜17:00		6月22日(土) 9:30〜17:00
会場	東京ビッグサイト東2・3ホール	会場	ポートメッセ名古屋第3展示館	会場	インテックス大阪1・2号館
所在地	東京都江東区有明3-11-1	所在地	名古屋市港区金城ふ頭2-2	所在地	大阪市住之江区南港北1-5-102

くわしくは ⟶ re-model.jp/

cera trading news

CERA TRADING

セラのお知らせ

「CERA総合カタログ 2013」を発行しました

↑"WATER JEWEL"VR4441
48,300円(税込)
385×385㎜

↑CERA総合カタログ 2013

セラトレーディングでは、2013年の新商品を掲載したカタログ「CERA総合カタログ 2013」を発行しました。
住宅はもちろん、店舗にもおすすめのサイズやデザインが魅力的な洗面器"WATER JEWEL"や、ボウル面が広くシャープなラインが際立つ洗面器"ML""TR"など、デザインと使い勝手にこだわった商品を多数ご用意しております。カタログのご請求は、セラトレーディングホームページ、またはファクスにてお申し込みください。

www.cera.co.jp

TOTO

TOTO News 2

第8回 TOTO水環境基金 20団体への助成を決定

NPOや市民団体の環境への取り組みを支援するために2005年に設立した「TOTO水環境基金」。第8回の募集・選考を実施し、20団体へ総額1,007万円の助成を行うことを決定しました。助成するプロジェクトは、水辺環境の保全、里山再生、希少動植物の育成など多岐にわたっており、13年4月からの1年間、各地でさまざまな活動が展開されます。
TOTOグループでは、環境ビジョン「TOTO GREEN CHALLENGE」の実現に向け、地球環境に貢献するボランティア活動「グリーンボランティア」を推進しています。本基金でも、社員のボランティア参加や情報交換を通じて団体と交流を深めており、年々活動の輪が広がっています。今回助成するプロジェクトにおいても、積極的にボランティアを募り、地域のみなさまとともに環境活動に取り組んでまいります。

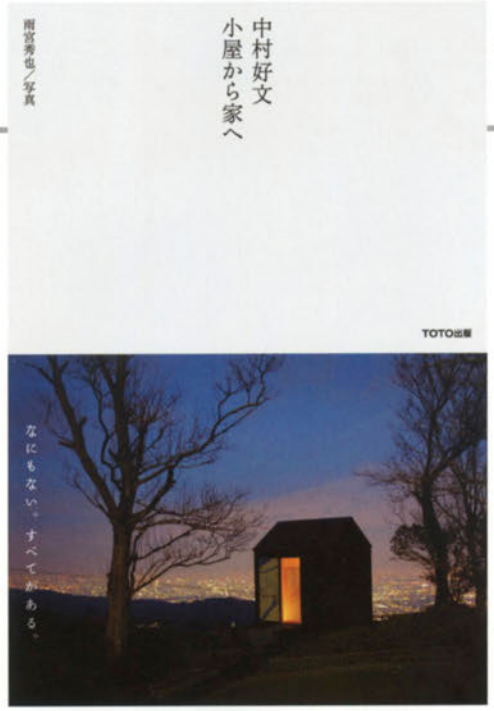
www.toto.co.jp

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など
知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

B Book

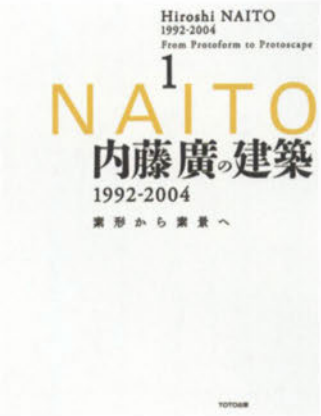
TOTO出版

TOTO出版のお知らせ



「小屋的なる」
別荘と住宅
12件を紹介

2巻組みの1巻目として
デビューからの
15作品を紹介



Book 1

『中村好文 小屋から家へ』

住み手の思いに寄り添う、良質で美しい住宅で定評のある建築家・中村好文氏。小さな空間にその思想が十全に生かされた「小屋的なる」別荘と住宅12件を、氏が影響を受けた古今東西の小屋とともに紹介。中村氏のすまいづくりの原点を探ります。デザイナー皆川明氏との小屋をめぐる対談も収録。

Present

プレゼント

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

- ●著者／中村好文
- ●写真／雨宮秀也
- ●定価／2,310円（本体2,200円+税）
- ●体裁／菊判、上製、240ページ、和文のみ

Book 2

『内藤廣の建築 1992–2004 素形から素景へ1』

内藤廣氏初の作品集で、２巻組みの１巻目として刊行。１巻目は、デビュー当時の1992年から2004年までの代表作15作品を紹介します。原図を多数掲載するほか、内藤氏が雑誌や著作物のなかで書いてきた文章を格言のように作品紹介ページに掲載し、写真・図面・言葉によって多層的に氏の建築に対する思考を紹介します。書き下ろしエッセイも収録。２巻目は2014年１月に刊行予定。

- ●著者／内藤 廣
- ●定価／3,780円（本体3,600円+税）
- ●体裁／B5判変型（190×250㎜）、並製、292ページ、和英併記

www.toto.co.jp/publishing

セラトレーディング
cera trading

●所在地／東京都港区
南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル
1階・地下1階
●電話／03(3402)7134
●営業時間／10:00～17:00
（日曜日は予約制）
●定休日／月曜日・祝日・
夏期休暇・年末年始

Bookshop TOTO
Bookshop TOTO

●所在地／東京都港区
南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル2階
●電話／03(3402)1525
●定休日／日曜日・月曜日・
祝日・「TOTOギャラリー・間」
休館中の土曜日・
夏期休暇・年末年始

TOTO出版
TOTO Publishing

●所在地／東京都港区
南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル2階
●電話／03(3402)7138
●ファクス／03(3402)7187
全国の書店でお求めください。
直営店Bookshop TOTOでも
お求めになれます。書店遠隔
の方はお問い合わせください。

アクセス／●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分●東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

次号『TOTO通信』は2013年7月上旬発行の予定です。

TOTO通信 2013年 春号

TOTO通信 2013年 春号 第57巻・第2号 通巻499号
発行日:2013年4月1日 発行所:TOTO株式会社 メディア推進部
〒154-8540 東京都世田谷区桜新町2-24-2 TEL.03(5451)1131

あしたを、ちがう「まいにち」に。
TOTO

空気を
ジャブジャブ
使えば
いいじゃん。

空気を含ませて、
水滴を大粒化する「エアイン®シャワー」。
大粒でたっぷりな浴び心地のまま、
従来品※1より約35%も節水※2しました。

平成24年度 省エネ大賞 (製品・ビジネスモデル部門) 主催 一般財団法人省エネルギーセンター エアインシャワー

eco products awards 2012 第10回エコプロダクツ大賞 エコプロダクツ部門 エコプロダクツ大賞 産業協議会会長賞受賞

＝W受賞＝

空気を含ませて
水の一滴一滴を大粒化

従来品 → エアインシャワー

めざしたのは、「気持ちいい節水」。感性工学に基づき、浴び心地が良い水滴の特徴を解析。少ない水で量感たっぷりのかつてないシャワーを開発しました。最適流量※3で比べた場合、毎分10ℓから6.5ℓに大幅削減。CO_2だって年間約146kgも削減できます※4。家計から見れば、水道代とガス代をあわせて年間約15,300円もお得※5。聞き流すのはもったいない、シャワーのお話でした。

エアインシャワー®

●「エアイン」はTOTO(株)の登録商標です。 ※1 従来品とは、取り替え対象と考えられる10年以上経過したサーモスタット混合栓＋最適流量10Lの従来シャワーを想定。 ※2 最適流量で比較した数字。※3 最適流量とは、(社)日本バルブ工業会の定める方法により社内モニターにて測定した「一番使いやすいと感じる流量」であり、流量の上限を意味するものではありません。 ※4 ※5 設定条件は以下になります。【使用人数】＝4人家族 【年間使用日数】＝365日 【年間水使用量(従来水栓の場合)】＝約58,130L 【年間ガス使用量(従来水栓の場合)】＝約171.8m³ ＊「エネルギーの使用の合理化に関する建築主等及び特定建築物の所有者の判断の基準」における給湯量(東京、4人世帯、床面積120m²の住宅)から算出 【使用料金】＜水道料金＞265円(税込)/m³ ＊東京都水道局(20A・30m³/月上下水道含む) ＜ガス料金＞＝165円(税込)/m³ ＊東京ガス(32m³/月)より 【CO_2換算係数】水＝0.59kg/m³ ＊省エネ・防犯住宅推進アプローチブックより ガス＝2.23kg/m³ ＊環境省「CO_2みえ～るツール」より 【ガス発熱量】45MJ/m³ ＊東京ガスより

TOTO GREEN CHALLENGE

TOTOのエコ水栓
GGシリーズ

浴室用水栓

エアイン(めっき)[TMGG40EC]

エアイン(樹脂)[TMGG40EW]

キッチン用水栓

エコシングル水栓[TKGG31E]

商品についての技術的なお問い合わせ 0570-01-1010 受付時間 平日9:00～18:00/土・日・祝9:00～17:00(夏期休暇・年末年始を除く) www.com-et.com

VEGETABLE OIL INK この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、ならびに印刷インキ工業連合会認定の植物油インキを主に使用しています。

TOTO通信のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999
＊当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp/)をご覧ください。

8164